

あたらしい風と創造

# からむし



**40 周年記念誌 からむし 76 号**  
2025（令和 7 年）3 月 麻生区文化協会



|    |                |                       |         |
|----|----------------|-----------------------|---------|
| 01 | 目次             |                       |         |
| 02 | 挨拶             | 麻生区文化協会 会長            | 板橋 洋一   |
| 03 | お祝いの言葉         | 川崎市長                  | 福田 紀彦   |
|    |                | 川崎市総合文化団体連絡会 理事長      | 中村 紀美子  |
|    |                | 麻生区長                  | 山本 奈保美  |
|    |                | 麻生区文化協会前会長・相談役        | 菅原 敬子   |
| 07 | インタビュー         |                       |         |
|    |                | 麻生観光協会 会長             | 高桑 光雄   |
|    |                | 昭和音楽大学 理事長            | 下八川 共祐  |
|    |                | 日本映画大学 理事長            | 富山 省吾   |
|    |                | 劇団民藝 舞台美術責任者          | 田口 精一   |
|    |                | NPO しんゆり・芸術のまちづくり 理事長 | 白井 勇    |
| 17 | 顧問および専門委員からの言葉 |                       |         |
|    |                | 顧問                    | 梶 亨     |
|    |                | 顧問                    | 佐藤 英行   |
|    |                | 顧問                    | 北條 秀衛   |
|    |                | 専門委員                  | ふじた あさや |
|    |                | 専門委員                  | 笠原 登    |
|    |                | 専門委員                  | 山室 茂樹   |
|    |                | 専門委員                  | 志村 幸男   |
| 21 | 座談会            |                       | 編集委員会   |
| 27 | 行事紹介           |                       |         |
|    | 文化祭            |                       | 菅原 敬子   |
|    | 夏休み親子教室        |                       | 佐藤 勝昭   |
|    | あさお古風七草粥の会     |                       | 橋本 周    |
| 31 | 部会活動紹介         |                       |         |
|    | 文化サロン部         |                       | 富田 宏子   |
|    | 舞台芸能部 洋舞       |                       | 伊藤 胡桃   |
|    | 邦舞             |                       | 中島 邦子   |
|    | 吟舞・吟詠          |                       | 正岡 皎    |
|    | 麻生フィル          |                       | 横須賀 朝子  |
|    | 美術工芸部          |                       | 小田島 寛   |
|    | アカデミー部         |                       | 横川 博行   |
| 41 | 資料             |                       |         |
|    | 10年の歩み         |                       |         |
|    | 文化協会アンケート      |                       |         |
| 50 | 奥付             |                       |         |

表紙

題字  
絵

笠原 登（秋水）  
佐藤 英行  
小田島 寛

写真提供



## 麻生区文化協会 会長 板橋 洋一

### 麻生区文化協会40周年に向けて「連携、参加、IT化」へ取組を

2024年11月、麻生区文化協会は創立40周年を迎えることができました。初代会長の藤田親昌さんを始め多くの先達が、麻生区の文化・芸術の向上に向けて積み上げてこられ、今日を迎えることができたものと思います。感謝の念に堪えません。同時に川崎市が市制100周年を迎え、市内各地でさまざまな催しが行われていることも共に祝い申し上げたいと思います。

40周年を記念し、記念事業実行委員会を立ち上げ、恒例の行事を冠事業として各部会にも工夫を凝らして開催していただきました。また、これまでご功績のあった方々の表彰、記念講演会、さらにはホームページのリニューアルも進めております。

この記念誌につきましても、福田紀彦市長、山本奈保美区長、中村紀美子総文連理事長からお祝いの言葉を賜り、大変光栄に思っています。記念誌発行にあたって当会の機関誌の「からむし」編集委員会にお願いし、役員会と一緒に企画、編集いたしました。顧問、専門委員からご寄稿いただき、会員のみなさまにはアンケート調査のご協力をお願いし、各部会からはこの10年間の報告をもらい、多くのみなさまのお力で作成することができました。

編集委員会で行いました座談会では、10年間の振り返りの中で避けることのできない新型コロナウイルス禍に際して、菅原前会長の文化協会の活動は切らさないとの判断のもと、各部会がそれぞれ万全の安全対策をとりながらご苦労して活動を継続させてきたことが語られています。

また、これからの文化協会の活動については、高齢化、会員の減少、後継者不足などの大きな課題に直面していますが、「連携」、「参加」、「IT化」などに取組むなど次への10年の方向性が示されました。

麻生区の文化・芸術のまちづくりは、さまざまな団体によって取り組まれています。文化協会もその一翼を担いながら、麻生区の市民のみなさまから親しまれるよう進めてまいりますので、今後ともご指導、ご鞭撻をお願いし、ご挨拶といたします。

川崎市長  
福田 紀彦



麻生区文化協会の創立 40 周年を心よりお祝いを申し上げます。

1982（昭和 57）年 7 月に麻生区が誕生し、その 2 年後の 1984（昭和 59）年 11 月に、「新しい区にふさわしい文化協会を」という住民の方々の思いにより、麻生区文化協会は創立されました。以来 40 年という長きにわたり、美術、洋邦楽、洋邦舞、俳句大会、文化祭、文化講演会、七草粥の会、そして会報誌の発行などを通して、麻生区の文化活動の要となって、毎年多岐にわたる地域に根ざした文化活動を続けられ、本市の伝統文化の継承や文化振興に多大な貢献をいただいておりますことにあらためて感謝申し上げます。

細長い地形の川崎市の北側に位置する麻生区は、緑豊かな多摩丘陵の自然に恵まれ、この 40 年の間には商業施設、住宅などが開発され、街の様子は大きく変わり、特に小田急線新百合ヶ丘駅周辺には、恵まれた住環境を求めて、多くの芸術家や文化関係者が移り住んできました。また、日本映画大学や昭和音楽大学、川崎市アートセンターなど芸術・文化関係施設が集積し、川崎・しんゆり芸術祭（アルテリッカ）や、KAWASAKI しんゆり映画祭、麻生音楽祭等、年間を通じて市民の手によるさまざまな芸術・文化の催しが開催されるなど、豊かな芸術文化が身近に親しめる街になっており、麻生区が「豊かな自然と芸術が溶け合うまち」として定着していると実感しています。

麻生区が持つ豊かな文化資源と、充実した文化施設、そして市民による活動は、地域文化のさらなる発展に大きく貢献するものと確信しておりますので、今後も麻生区文化協会の活躍により、地域文化が一層活性化していくことを期待しております。

川崎市は 2024（令和 6）年 7 月に市制 100 周年を迎えました。誰もが身近に文化芸術に触れ、親しむことができるまちを目指し、豊かな地域資源を活用した特色ある取組を推進し、これからもより一層文化芸術振興への取組を進めてまいりますので、次の 100 年に向け、共に歩んでまいりたいと思っております。

結びに、今後の貴協会の益々のご発展と、会員の皆様のご健勝をお祈りして、麻生区文化協会創立 40 周年のお祝いのあいさつといたします。



川崎市総合文化団体連絡会  
理事長

中村 紀美子

## 麻生区文化協会 40 周年に寄せて

麻生区文化協会創立 40 周年お目出度うございます。（川崎市も市制 100 周年を迎え 7 月 1 日にはミュージカかわさきにて記念式典並びに表彰式が行われました。）この佳節の年を皆様とお祝い出来ますことを大変うれしく思います。

川崎市は昭和 47 年に政令指定都市となりそれから 10 年の後麻生区が誕生しました。それ以来貴協会の文化活動は、藤田親昌初代会長、箕輪敏行二代会長、杉本長治三代会長、京利幸四代会長、菅原敬子五代会長そして板橋洋一六代会長へと受け継がれ今日を迎えたのだと思います。

活動内容も舞台部門の邦楽・邦舞・洋舞の発表会をはじめ、吟舞・吟詠、麻生フィルハーモニー管弦楽団の演奏会。文化財団と合同主催の美術展、教育委員会との共催の夏休み親子教室、俳句大会、デッサン会等。そして 1 月 7 日の古風七草粥の会は特筆すべきだと思います。また、会報「からむし」はとても素晴らしい内容で、会員の皆様の生き生きとした活動・活躍が手にとるようにわかります。このような伝統・文化の受け継ぎがどこも大変な時代に、子ども達への夏の親子教室はとてもよい活動で会員が増える事を祈りたいと思っています。貴協会の活動をお手本にしながら総文連も活動を活発にしていきたいと思っています。

最後になりましたが、令和 6 年の元旦の能登半島地震からはじまり、夏の大雨等自然災害の多発で災害に会われた方達も大変だったと思います。一日も早い復興を願いつつ理事長の挨拶いたします。

麻生区長

山本 奈保美



麻生区文化協会創立 40 周年を心からお祝い申し上げます。

麻生区の文化活動の中心として 40 年にわたり活動が続けられ、多彩な文化の継承や地域の振興に尽力してこられたことに、改めて深く敬意を表すとともに感謝申し上げます。

麻生区は、小田急多摩線新百合ヶ丘駅の開業とともに街が急速に発展し、開業 50 周年を迎えた令和 6 年(2024 年)現在、人口はおよそ 10 万人から 18 万人にまで成長しました。緑豊かな街並みや風土から、新たな住民の中には芸術文化に造詣の深い方々も多く転入され、「芸術・文化のまち麻生」の素地が造られたのではないかと思います。

川崎市は同年市制 100 周年を迎え、芸術・文化に関わる多彩な記念事業を行い、大勢の区民の方々に楽しんでいただくことができました。100 周年記念事業を通じ、文化協会をはじめとする区内の芸術・文化団体の皆様の長年にわたる活動が、「芸術・文化のまち麻生」としてのさらなる魅力向上につながったものと改めて感謝申し上げます。

100 周年記念事業の中でも特に麻生区の「推し！」の絵画展では、区内のお気に入りの風景を描いた作品や区内で楽しめるイベント等のたくさんの応募があり、麻生区文化協会賞では演奏会の様子を描いた作品が受賞され、日常的に音楽活動が盛んな麻生区の魅力が巧みに表現されていました。改めて市民の文化力の高さを実感したところです。

令和 7 年 1 月 7 日に開催された「あさお古風七草粥の会」は、貴協会の創立 40 周年記念事業として行われており、区の伝統文化を伝える催しとして多くの方々に親しまれ、今回 21 回目を迎える麻生区らしい事業の一つです。本事業がこのような長く続けてこられたのは、貴協会がこの催しを大切に育んでこられた賜物と存じます。

麻生区は令和 5 (2023 年) 5 月に男女ともに平均寿命日本一(男性 84 歳、女性 89.2 歳)であることが厚生労働省から公表されました。健康に年を重ねていくためには精神的な豊かさがとても大切であり、芸術文化活動は、人と人とのつながりを進め、心の潤いや豊かさを醸成するもので、健康寿命延伸への取組の一つであると思います。

今後につきましても、芸術文化資源に恵まれた環境や芸術文化活動に携わる皆様のお力を活かして、区民の皆様が心の豊かさを育み、ふるさと麻生により愛着と誇りを持ち、だれもが住み続けたいまちづくりを進めてまいります。麻生区文化協会の皆様には引き続きご支援とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

麻生区文化協会の益々の発展と会員の皆様のご健勝を祈念いたしまして、創立 40 周年のお祝いのことばといたします。



## 麻生区文化協会 前会長・相談役 菅原 敬子

### 麻生区文化協会創立40周年を迎えて

麻生区文化協会創立30周年（2014年）から10年、あっという間の10年でした。振り返ってみて、着実に歩んできたように思います。特に会の役員、各部会の役員の方々の大きな力は会の運営や対外的な対応など事業の推進力となり協力と努力によって成果をあげてきたと云えます。10年間支えて下さいました皆様に心より感謝とお礼を申し上げます。各自の特技を生かし各部会の内容の充実をはかり進めて下さいました。文化協会として地域や区役所など各方面にわたって活動の実績を積み、認知度をあげ地域のタウン紙やニュース等でも多く取り上げられてきました。

文化協会設立に当って「麻生の歴史を大切に、その歴史をつなぐことを基本」に新しい街、新ゆりを「芸術・文化」の花咲く街にするよう関係団体、関係者と共に進めてきました。以下その主だった事業を上げてみました。

- ◆いつもホール満席の「麻生フィル」の演奏会
- ◆地域に定着し麻生の風物誌となっている「あさお古風七草粥の会」
- ◆親子で参加する「夏休み親子教室」
- ◆文化協会誕生から発行を続けている機関誌「からむし」の改善
- ◆黒川にけい古場をもつ「民藝」との連携によるデッサン会
- ◆「アルテリッカ新ゆり美術展」は、5月に麻生区をあげてとりくんでいる「アルテリッカ芸術祭」の一環に位置付けさせることができ、麻生美術家協会と共催で続けて毎年1500名を超える方々がご来場され、高い評価を頂いています。
- ◆各部門参加の「文化協会文化祭」は麻生区ならではの俳句講座や俳句大会、日本舞踊や洋舞のすばらしい舞台、詩吟、美術展、講演会等コロナ禍の時期をのぞき多くの方に参加頂いてきました。

### 今後の課題～これから～

麻生区が長寿日本一となり喜ばしいことではありますが、会員の高齢化が進み、子どもの数が減少していく現状があります。それによる学校規模、学校の合併等、又、働く親そして働らき方の変化があり、情報提供や事業のあり方を変えていかなければならないでしょう。充実したHPとその運営が必須の事態です。会員や区民への開かれた文化協会となるよう情報提供を進めてほしいものです。これからの時代の変化への対応が益々求められてくることでしょう。「2025川崎・しんゆり芸術祭（4月6日～5月11日）」、それを「村まつり」に位置づけ共に楽しく関わっていきますよう、又、地下鉄3号線の延伸の進捗に合わせつつ歴史をふまえ、新しさをとり入れ進んでほしいものです。次の10年に期待しつつ。



麻生観光協会  
会長

**高桑 光雄** さん

高桑光雄さんは、JA セレサ川崎組合長など長く川崎の農政のリーダーとして勤めてこられました。その後川崎フロンターレ麻生アシストクラブ会長を務め、2022 年麻生観光協会の会長に就任されました。

文化協会と共に、地域の文化を大切にする会の代表としてお話を伺いました。

### 古い歴史と新たな魅力があるまち

聞き手： 本日は、お忙しいところで自宅にまで伺いましてお話をお聞かせいただくことになり、恐縮しています。

高桑氏： この地域は昔から教育熱心なところで、師範学校を出られた方が多く住んでいました。青戸塾とか落合塾などの個人塾もあり、長く地域の文化や歴史が語り継がれていきました。

また麻生区は緑と自然が多く残っていて、住みやすい場所でもあります。私も長く JA で農業と農政に関わり、その後観光協会初代会長の小島一也さん、二代目の笠原さん、三代目の立川さんの後を継いでいますが、農業つながりで観光協会の役員はずっと続けていました。

聞き手： 麻生観光協会の特徴的な取組は、どのようなものですか。

高桑氏： 観光ガイドの会が主として麻生区民を対象に定期的に催し物を企画していただいています。

日本最古の甘柿といわれる禅寺丸柿の原木がある王禅寺は古刹として有名ですし、麻生不動院の木賊だるま市は関東納めのだるま市で賑わいます。

また月読神社、羅漢像群がある浄慶寺はあじさい寺としても有名です。琴平神社細山の五重の塔、神社仏閣など名所旧跡も数多くあります。

ただ、歴史ガイドの方々も高齢化で新しい人が多く入っていただけないのが悩みですね。



聞き手： 文化協会の課題も同じです。加入団体もその活動の維持に苦しんでいます。

高桑氏： 農業については、麻生区は岡上、黒川、早野と市内で唯一農業振興地域に指定されており、厳しい環境の中で皆さん頑張っています。そして、そこで収穫された新鮮な農作物がセレサモスや直売会を通じて区民の皆さんに供給されているのも麻生区の特徴の1つです。

また区の木に指定されている禅寺丸柿は 1214 年に発見されたといわれ、2014 年には 800 年祭を行いました。禅寺丸柿は、農家の生計を支えていた時期もありましたが、時代の流れの中で消え去っていかないように保存会を立ち上げました。柿ワインやお菓子などを作って親しんでいただいたこともあります。

そして麻生川の桜祭り。柿生から新百合ヶ丘まで川沿いに咲く約 250 本の桜は散策するにももってこいですが、開花時には踊りや歌などのイベントが行われ、多くの皆さんに楽しんでいただいています。

そうそう 1994 年に区政推進事業として新都心街づくり財団と区役所が始めたこの桜祭りがきっかけになって、2001 年に麻生観光協会が生まれたと聞いています。

ただ、麻生川沿岸土地改良区の事業で植栽され、いまでは桜の名前となっていますが桜の木が老木になって倒れるなどの危険性があるって18本ほど切られてしまっていて、その植え替えに行政から力添えをいただいています。

文化協会との関係では設立以来長い歴史がありますね。麻生には有名な文化人も多くいらっしゃいます。先日も俳句大会に伺いましたが、観光協会と文化協会がうまくコラボできるといいですね。また七草粥の会は盛況で長くやられていますね。

観光協会では2年に1度、観光写真コンクールを行っています。区内の名所旧跡がさまざまな視点で撮られていて素晴らしいですよ。

また毎年菊花大会も開催していますが、地域の方々が丹念に栽培されてできた菊の花は区民に潤いを与えています。



聞き手：観光協会と文化協会の両者が共有できるものがありそうですね。

高桑氏：あと麻生の魅力といえば、芸術・文化ですね。日本映画大学、昭和音楽大学があって、若い人たちが新百合ヶ丘駅周辺で活動しています。芸術文化の発信拠点としての役割は大きいと思います。

このような麻生の魅力を大いにPRする努力をしていきたいと思っています。たまたま今年は川崎市制100周年ということで都市緑化フェアなどが取り組まれています。川崎南部の人たちは麻生区の農業や緑についてあまり縁がないようです。もっと、南の人たちとの交流を深めて、麻生の魅力を知ってもらいたいと思っています。

それとフロンターレ。片平にはフロンターレの練習場と選手の青玄寮があります。桐光学園も文武両道でスポーツも全国大会にいろんな種目で出ています。長寿日本一も含めてスポーツや健康も魅力になっていますね。

聞き手：観光協会の課題などありますか。

高桑氏：どこの会も同じでしょうが、後継者問題ですね。観光協会も創立から25年になりますが、これまで役員の方々が頑張ってきてこまできましたが、高齢化は否めません。ガイドの会や禅寺丸柿保存会、菊花会の皆さんも高齢化して、後継者がなかなかみつからない。

聞き手：文化協会も同じです。

高桑氏：横浜市営地下鉄3号線が新百合ヶ丘まで延伸することになっていますが、期待したいですね。交通の便が良くなりますし、都市計画を通して麻生区がさらに魅力ある街になって欲しいと思います。

聞き手：今日は、長時間にわたって麻生の魅力について語っていただき、ありがとうございました。引き続き、文化協会との連携をお願いします。

2024年12月10日

自宅にて

(聞き手：板橋洋一)



昭和音楽大学  
理事長

## 下八川 共祐 さん

昭和音楽大学の下八川理事長には、30 周年記念誌の際にもインタビューさせていただきました。2007 年に厚木から新百合ヶ丘に校舎を移転して、校舎だけでなくテアトロジーリオというオペラ専門の大ホールが併設され、新百合ヶ丘の新たな象徴となり、芸術・文化のまちづくりにも拍車がかかりました。

この 10 年を振り返っていただきながら、新たな展望などを語っていただきました。

### 新百合ヶ丘駅周辺の発展に期待して

聞き手： 本日は、お忙しい中、お時間を頂きありがとうございます。早速ですが、この 10 年の間で学校として大きな変化はございましたか。

下八川氏： あまり大きな変化はありませんが。留学生が多くなった感じはありますね。特に中国からの留学生が増えました。文化の違いがありますが、溶け込んでいるように思います。

また、私は専門外なのですが、音楽療法は先生も学生もとても真面目で、地域福祉との関係もうまくいっているように聞いています。麻生区も長寿日本一になったことで、いい連携を図っていきたいですね。

また本大学の特色として、バレエやミュージカルなどの分野もあり、またオペラや管弦楽などのクラシックだけでなく、ジャズやポピュラー系の学生も増えています。

聞き手： 私もバレエ教室に携わっていますが、生徒さんには厳しさの中に楽しさを感じてもらえるレッスンを行っています。

下八川氏： バレエの方はストイックな感じがしますね。レッスン前の予備体操などストレッチというんですか。バレエは自分の体を酷使して体全体で指の先まで使って表現するのだから大変ですね。見ててかわいそうなぐらい体を痛めている。

その意味で長く続けられている方は、歌舞伎のような伝統芸に近いのかな。オペラもそうですが、歳を重ねてくると限界というものがあるのかもしれないですね。

本校と関係の深い藤原歌劇団・日本オペラ振興会が黒川に稽古場を作ったこともありましたね。

聞き手： 私は、日本オペラ協会の郡愛子さんと同学年でして、クラスは同じになったことはないのですが、一緒に音楽を学びました。

下八川氏： 小さい頃に音感を養うのは、大切なことで楽器から入るのがいいですね。歌は早くからやらない方がいいんです。基本的な聴音が大事です。教則本などは後から学べばいいのだと思います。

バレエやピアノでも基礎が大事で、後は素材ですね。これは日本の芸事も同じでしょうが。



聞き手： テアトロジーリオという素晴らしい施設は、まさに新百合ヶ丘の財産になっています。私も 2 回ほど演奏させていただきましたが、演奏がすごく良くなりました。サントリーホールだと演奏がやりにくかったという経験があります。

下八川氏： 残響がありすぎるのかもしれませんが、聴く方はいいのですが、演奏する方は音のタイミングが難しいかもしれません。

ジーリオは、オペラ用のステージなので、とても広く、歌いやすいんです。ただ、オーケストラ演奏だと直接的に聞こえてしまうので、反響板を設置して行っています。



聞き手： 話が変わりますが、麻生に來られてどのように思われますか。

下八川氏： 新百合ヶ丘周辺は小さな地域に音楽や芝居などができるホールが多く集まっています。大きなまちではないので、人口の割合で行けば外国にもないのではないのでしょうか。

また新宿まで 20 分くらいで近いですし、近隣の多摩市のパルテノンもありますし、それとお客さんもいいですね。これも長寿の秘訣かもしれませんね。

ただ、やはり高齢化と一家族当たりの人口減少は否めません。我が家も 4 人で住んでいましたが今では夫婦だけになっています。お隣さんなども同じようです。駅周辺の住宅地で空洞化が始まっているようです。

それとアルテリッカを開催して感じるのですが、初めて新百合ヶ丘に來られる方がこんな立派なホールがあるんだと感心している声を多く聞きます。

なかなか多摩川を越えた東京方面へのアピールが少ないのかなと思います。小田急線沿線で成城学園などは音楽ファンが多いので、そちらへの PR も大事なのかなと思います。

聞き手： 横浜市営地下鉄 3 号線の新百合ヶ丘駅への延伸が計画されているようですが。

下八川氏： 大きな期待をもっています。特に北口には麻生区役所、文化センターなどの公共施設が多くあるので、再開発

の際は大いに活用して欲しいですね。

大きくなくてもいいホールがあったらいいですね。かつて仙台の先にいいホールができて遠方からも人が來たということを聞いています。イタリアでもそうですがいっぱい人が入るホールは少ないですよ。千人くらいのコンサートホールや四百人くらいの芝居ができるホールですね。年に何回もやっていけば多くの人が集まる、というような感じですね。

また、映画大学もあるのですから、映像系の資料が見られる情報センターのようなものもあればいいですね。

聞き手： 最後になりますが、文化協会へも一言お願いします。

下八川氏： 私がここに移転してきたのは四十代の半ばでした。文化協会には幅広く文化・芸術活動をされている方が多くおられました。最初にお会いしたのは藤田親昌さんで、アートセンターの話などが出ました。

まだ、新宿に専門学校がありましたので藤原歌劇団の活動では民藝のみなさんや劇団四季の方々と一緒に国に要望していた頃でした。その中に、麻生区に住んでいる文化人やアーティストがいらしていたことを覚えています。

アルテリッカのボランティアさんのなかにも海外赴任などの経験があり、文化・芸術に造詣の深い方もいらっしゃるようです。

そういう意味で日本で一番高いレベルなのかもしれませんね。

聞き手： とても参考になるお話を伺うことができました。ありがとうございました。

2024 年 11 月 20 日

昭和音楽大学北校舎にて

(聞き手：伊藤胡桃・横須賀朝子・板橋洋一)





日本映画大学 理事長  
およびアルテリッカ 実行委員長  
**富山 省吾** さん

2018 年に日本映画大学の理事長に就任された富山省吾さんは、東宝株式会社で「ゴジラ vs ビオランテ」をはじめ数々のゴジラシリーズの映画を制作されたプロデューサーとして有名で、2004 年から 2010 年まで東宝映画の社長も務められた映画人です。

2018 年には「文化庁創立 50 周年記念表彰」を受章されています。

2023 年から川崎・しんゆり芸術祭（アルテリッカしんゆり）の実行委員長を務めておられ、麻生区文化協会が関わるアルテリッカ新ゆり美術展にもご来訪頂いています。

### デジタルコンテンツを含む美術館の建設を

聞き手： 今日、ご多忙のところ、時間をとっていただきありがとうございます。初めに、麻生区文化協会についてどう思われているか、お伺いします。

富山氏： 文化協会を創立された藤田親昌さんは「文化」が人間の行動の指針になるとして、文化協会を地域の中核に位置づけられたと聞いています。民衆の芸術イコール文化と考えておられました。文化の根っこにはそこに暮らす住民が大切です。

聞き手： 富山さんは、アルテリッカしんゆりの実行委員長を務めておられますが、17 年目を迎えるアルテリッカをどのように捉えておられますか。

富山氏： アルテリッカ 2025 は、「今、生きる昭和」というテーマにしました。25 年は昭和 100 年に当たります。

昭和という時代は、日本が復興により高度成長し世界一をめざすイケイケの時代でした。平成になってそれが良かったのかという振り返りもありましたが、令和の新しい視点で昭和を見直そうという発想です。

聞き手： 文化協会は高齢化し、若い世代をどう採り入れるか課題になっています。

富山氏： アルテリッカは運営のすべてをボランティアである実行委員とアートボランティアのみなさんで進めていますが、接点がありません。そこでグループワークと一緒に企画・宣伝・販促を検討したり、当日の公演に実行委員も参加してもらう。そうすることで参加してくれている若手と、上の世代のギャップも埋めたいと思っています。

聞き手： アルテリッカしんゆりは 16 年継続してきていますが、どう思われますか。

富山氏： 2020 年にコロナ禍が起き、試される 3 年間でした。アルテリッカとは何か、確認し合うことが重要です。基本は「地元発」「老若男女」「あらゆるアート」の 3 つです。「オペラハウスがあってオープニングで華々しくオペラが演奏される」何と言ってもオペラは他にはない強みです。「世界からお客さんが新百合に集まる」イベントに成長していきたいです。



聞き手： 働きにきたり、観光にきたりで外国の方が増えてきていますが、国際化をどう捉えておられますか。

富山氏： 新百合ならではの文化を発信できれば、外国の方に来て頂けるまちになると思います。「食材と文化」を発信するのは如何でしょうか？「ライブアートがあり、美味しい食もあるまち」になれば、世界中から人を呼べると思います。「アートと食」のエリアマネジメントを進めたいですね。

聞き手： 映画大学には留学生が多くいますね。  
富山氏： 留学生は大学のカリキュラムが忙しく、家と大学の往復だけで新百合の街を楽しんでいるとは言えません。食（中華料理、韓国料理など）を通じて、留学生との文化交流を進めたいです。麻生区には成人した子どもが家を離れた世帯が多いので、ホームステイもお願いしたい。

聞き手： 話題が変わりますが、最近の SNS が映画界に与えた影響は如何でしょうか  
富山氏： 今迄は、映画の評判はテレビの CM のような宣伝で決まりましたが、最近では SNS を通じてお客さんが自分で決める傾向が強まっています。

聞き手： 最近では、クラウドファンディングの発展で映画作りも変わりましたね。  
富山氏： 無名の人でもクラファンでお金を集めて、映画を作れる。「作りたい人が作れる」時代が始まって、作り手にとってはチャンスが増えましたね。

聞き手： 若い人が、自分たちだけで楽しんでいる傾向があるように思いますが。  
富山氏： 最近の学生は能力があっても、目立ちたくないという傾向があります。でもこちらのアプローチを変えると、深く理解している学生を見つけられます。

聞き手： デジタル化で映画作りも変わってきましたね。  
富山氏： 映画の歴史を振り返ってみると、技術革新と共に発展してきました。はじめはモノクロ・無声だった映画が、色と音を得て、さらに大スクリーン、3D と。最近はデジタル化で配信が簡単になりました。DX 化と高速通信によって視覚効果も急速に進展しています。2023 年の山崎貴、VFX・脚本・監督による「ゴジラ-1.0」は、世界の人に受け入れられました。



聞き手： 映画大はデジタル化の流れにどのように対応されていますか。

富山氏： 映画の大学として十全なものとなるために新しいコースを 2 つ作りました。VFX 特撮コースは日本の視覚効果の第一人者である尾上さんをお願いして責任者になって頂きました。また、映画作りは全体の流れの把握が大切なので、企画から劇場までのワークフローを学ぶマネジメントコースを作りました。どちらも他にはないコースです。卒業後の進路として、映像リテラシーを身に着けた学生が出身地の役所・博物館などで映像制作を強みとして活躍して欲しいと願っています。

聞き手： しんゆりには、音楽、舞台、映画で、シネコン、オペラハウスはあっても、美術館がありません。アルテリッカ新ゆり美術展は、新百合トウェンティワンホールの多目的ホールを臨時に美術館仕様にして展示しています。常設の美術館が欲しいと思っています。

富山氏： デジタルコンテンツを展示できる、さらにアナログのアーカイブ機能も持った、南口からも見えるようなシンボリックなフォルムの美術館が欲しいですね。

聞き手： お忙しい中、希望の持てるお話しをお聞かせ頂きありがとうございました。

2024 年 12 月 12 日  
日本映画大学新百合ヶ丘キャンパスにて  
(聞き手：佐藤勝昭、板橋洋一)





劇団民藝  
舞台美術責任者

田口 精一 さん

田口精一さんは、1951 年に劇団民藝に入られ今年で 75 年、御年 95 歳を迎えられました。まだまだ矍鑠として、東京から黒川の稽古場に通われています。

30 年記念誌にもご登場いただき、宇野重吉さんや滝沢修さん、北林谷栄さん、大滝秀治さんなどの名優との思い出などを語られています。

今回も、どのようなお話がいただけるか楽しみにインタビューしました。

聞き手： 今日、稽古場をお借りしいろいろお話を伺えればと思います。早速ですが、文化協会は、毎年民藝の女優さんに来ていただいて「民藝の女優さんを描くデッサン会」を開催しています。大変人気のある行事でご協力に感謝しています。

田口氏： 新百合ヶ丘がまだ草ぼうぼうでね、市民の要望によって麻生市民館ができた。そのときにお芝居をやったのですが、文化協会の会員さんの中で、稽古場に来て民藝の俳優さんを描きに来ていた方が 3 人ほどいらして、交流が深まりました。そのお弟子さんたちも連れてこられるようになり今に至ります。

最初はシェイクスピア劇のそのままの衣裳で描いてもらったのですが、評判になりました。他の劇団ではやってないんでしょうね。定期的に舞台女優を描くことをやっていると

ころはないんじゃないかな。劇団としても公演中の芝居からそのままの衣裳を着た女優さんを描いてもらうことで、お芝居の宣伝にもなりますしね。

滝沢修先生も絵が大好きで劇団員の中で絵を描く仲間ができた。文学座の中村伸郎さんなども来られ、俳優座の仲間も加わって三劇団合同展を開いたこともありますね。

聞き手： 素人の疑問で恐縮ですが、同じ女優さんを描いているはずなのに、出来上がった絵は色使いや容姿が必ずしも一緒ではないのが不思議なんです。ただ写実的に描いているわけではないとは分かるのですが。

田口氏： 絵を描く人の発想が重要なのでね。感銘を受けたものを絵に描きとめたいという。しかし、女優は単なるオブジェではないんですよ。休憩時間にモデルと話してみても、その思いや印象などを踏まえて写実的に描くのは違って、この女優さんがどのようなお芝居をするのかを想像して描くんです。いまでも会場で指導されているプロの方からの「私たちはいま最高の贅沢をしている」との嘆声を忘れられません。



聞き手： もう一つ、モデルさんのポーズが結構きついにも関わらずずっと静止しているのも大変じゃないかと。

田口氏： 普通のモデルさんは、描いてくださって座っているだけでしょ。女優さんは衣裳を着て動きのある芝居をする、その一瞬のポーズをとる。ただ立ったり座ったりしているのではなく、お芝居の流れの、ある瞬間の姿なんですね。しかもそのポーズをずっと取り続けることができる。自由に座ってくださって言ったのに芝居中の猫背のポーズをとる。そしてその形が崩れない。この方が楽だなんて言っていました。

出来上がった絵を見て「自分がどう見られていたかを発見し、大変勉強になりました」との女優たちの声がうれしいですね。

絵を描く方もその姿から、女優という芸術家を描いているんだという気になっていくのでしょうか。

亡くなった奈良岡朋子さんのお父上は奈良岡正夫さんという画家で、本人も美大の洋画科で学んでいた。民藝に受かったとき、芝居をとるか絵をとるか迫られ、絵筆を封印されたそうです。民藝に入ってどうしても絵を描かなければならなくなりました。するとその絵をお父上が一瞥「うん、手は落ちてないな」と言われ、ほっとしたとか。絵と芝居は共通するものがあるんですね。

話を戻しますと、今、芝居でも写真を撮るでしょ。あまり面白くないですね。どんな芝居でもその場面だけとってみれば想像はつくのだろうけど、感動はないですね。たとえクロッキーでも、絵からはぐっとくるものがある。

昔、楽屋で絵を描くのが流行ったことがあり、鑑賞団体との交流会で賞品になったこともあります。お芝居と絵は最初からコラボできるということなんです。北林谷栄さんや大滝秀治さんもうまかったですね。

巡業で旅にでるでしょ。俳優さんから自筆の絵葉書や寄せ書きが送られてくる。元気ですよ、とかね。もう、たしなみを超えています。

聞き手： いろいろなエピソードがあって、つい聞きほれてしまいました。話を变えますが、黒川に日本オペラ振興会の練習場ができて、読売交響楽団の練習場もあって、この地に日本有数の芸術集団の稽古場が集まってきました。「黒川稽古場村」とも呼ばれているようですが。

田口氏： オペラも昔からつながりがあるんですよ。制作部同士の付き合いがあってね。いまは途絶えてしまったのですが、学びあえることがいっぱいあるのにもったいないですよ。

聞き手： 文化協会にも一言いただけますか。

田口氏： 初めて文化協会の集まりにいったとき、藤田親昌さんがいらして、「谷栄さんは元気？」と声をかけてくださり、すぐ民藝とつながりました。踊りや伝統文化などとコラボできると思います。そうした中で若い人にどうつなげていくかですね。

聞き手： 今日は、いろいろ隠されたエピソードを聞かせていただくことができて、勉強になりました。滝沢修さんや宇野重吉さんなどレジェンドのお名前がたくさん出てきてさすが民藝の歴史と団員の方々のご活躍ぶりが改めて分かりました。今回は、文化協会にご協力いただいています「民藝の女優さんを描くデッサン会」を主に紹介させていただきましたが、そのほかのことも何かの機会で公開の場面でいろいろお話を伺いたいと思いました。その節は、よろしくお願いします。

2024年12月20日  
劇団民藝稽古場にて  
(聞き手：板橋洋一)



NPO しんゆり芸術のまちづくり  
理事長

**白井 勇** さん



聞き手： 本日は、お忙しいところありがとうございます。  
NPO しんゆり・芸術のまちづくり  
(以下、NPO) についてお話いただけますか。

白井氏： NPOになる前の活動として新百合ヶ丘駅前のイルミネーション「Kirara@アートしんゆり」を始めてから今年で18年になります。新百合ヶ丘駅周辺の発展は、40年ほど前に麻生区が多摩区から分かれ、小田急多摩線の開通により新百合ヶ丘駅ができたのを「第一のまちびらき」、20年ほど前に北口側に万福寺の開発、アートセンターの建設、南側に昭和音楽大学が移転してきた「第二のまちびらき」がありました。  
それまで、緑豊かに発展する農住構想と地域住民の素養の高さを表す文化・芸術のまちづくりを市民参加で進めてきましたが、日本映画学校が映画大学に発展することも重なり、

地域からさらに盛り上げようと川崎市の支援もいただきながら民間主導で取り組んでいく気運から生まれたものです。

その後、NPO 法人格をとり、オーリーブ祭り、シンポジウムなどのイベントを行い、現在は年2回南口デッキでのストリートピアノや、文化・芸術交流カフェとその参加者と共同で行うカフェ・グランデなどのイベントの他、新百合ヶ丘駅周辺で行われる文化・芸術イベントの後援とPRボードを使った広報、ホームページでの紹介、アートセンターでの文化・芸術のまちの広場などを行っています。いずれもNPOだけではなく、交流カフェに集まる団体、エリアマネジメントコンソーシアム、区役所などと協働しています。

聞き手： 芸術のまちづくりに向けてさまざまな取り組みをされていらっしゃいますが、NPOを運営されていくうえで、心がけていることはありますか。

白井氏： 新百合ヶ丘駅周辺は、都市景観形成地区に指定されていて、街の美観を損ねないようにしようということになっているのですが、反面、宣伝や看板などの設置といった面で色づかいや大きさなどの制約があります。私個人としても、落書き消し隊などで美しい街並みを守る活動もしていますが、街の賑わいづくりにも必要ですので、その兼ね合いの中からパイオニアになろうとしています。アルテリッカ、麻生音楽祭、しんゆり映画祭、新百合マルシェなども多くの方が集まっていますが、美観と賑やかさ、そしてお洒落な街並みが調和した新百合ヶ丘駅にしたいですね。



聞き手： 新百合ヶ丘の街を大切にしたいとの思いの原点はどこにあるのでしょうか。

白井氏： 古くから細山に住んでいますが、学生時代に建築設計を学び、卒論は新百合ヶ丘の開発でした。民間の建設会社に勤め、文化ホールや劇場の設計などに携わり、仲間とさまざまな議論をしました。

その後、新百合ヶ丘で設計事務所を経営するようになり、行政が行う地区カルテや都市マスタープランづくりに加わり、アートセンターの建設委員会のメンバーにもなりました。多様な市民の方々と議論し、作り上げていくまちづくりに興味を持ちました。

聞き手： 学生時代から新百合ヶ丘、麻生区への関心が高かったのですね。

数年後には横浜市営地下鉄3号線の新百合ヶ丘駅への延伸が決まり、新たなまちづくりの動きが出てきていますが。

白井氏： いわゆる第三のまちびらきですね。南口に比べて手狭な北口周辺の再開発が目論まれています。専門的になりますが、かつての都市計画は丹下健三さんのように大きな建物を中心に組み立ててきましたが、オイルショック後は街角・街裏などの小規模開発が主流になりました。

その後、新自由主義というか規制緩和があり、最近はタワーマンションなどの大きなエネルギーをかけたまちづくりになっています。武蔵小杉のように川崎でも駅前再開発では当たり前の光景になっています。

聞き手： 新百合ヶ丘もそのようになってしまったのでしょうか。

白井氏： 街づくりのテーマは、みんなで議論し、中心になる人の思いを反映し、デベロッパーが作って終わるというサイクルですが、街の風景がどこも同じでつまらないものになっていく傾向があります。新百合ヶ丘っていいところですねというアンサーをもらえる街にするためには、しんゆりらしさ、芸術のまちづくりもその一つですし、そして里山も残る丘陵地と

していい風景も大事にしたいですね。

大きなコンサルが同じような街をつくってしまう。隈研吾さんが提唱しているように、しんゆりらしさはなんだろうという議論をすべきですね。地方に行くと図書館が駅前に隣接している所がある。人の居場所を提供しているんですね。しんゆりには美術館がないのでビルの屋上を利用した美術館という発想も必要ではないかと思います。

聞き手： 最後に文化協会について何かございますか。

白井氏： 長年継続してこられた方々に敬意を表します。ただ、文化協会は名前からも古いイメージがありますね。利益や商売ではないので人が寄ってこない課題もありますが、切り口を開けて若い人からも関心を持たれるとか。若い人は人を求めてきていますので、それに応えていく方向があると思います。

聞き手： これまでの経験から、さまざまなお話を伺えました。今後ご活躍を期待しています。

2024年11月19日  
川崎市アートセンターにて  
(聞き手：板橋洋一)



しんゆり・芸術のまち



顧問

## 梶 亨

### 「あさお古風七草粥」の風景

麻生区には農村的風景がまだ見られ、そうした特色を活かし、市民に楽しみと健康を与えようと始められたのが「あさお古風七草粥」である。麻生区文化協会が日本古来の伝統行事を継承し、多くの人々に知ってもらおうと始めた。

七草粥のスタッフは、春の七草を地元で生育し、前日から仕込みを行い、1月7日には千食程の七草粥を作り上げる。

当日は、多くの市民が行列をなし、七草粥を美味しそうに食べる和やかな光景は、新春らしさに溢れている。

七草粥は、元々は神への感謝と豊作祈願を込めて食べる民俗行事で、今は新しい年を健康に過ごせるよう、1月7日に春の七草をお粥に入れて、無病息災の健康を祈る民俗行事として定着している。

七草は「せり、なずな、ごぎょう、はこべ、ほとけのざ、すずな、すずしろ」の7種類。七草粥を作り終えると、古い家では、それを神棚や仏壇にあげ、家族団らんの中で食べるようだ。日本各地を調べると、七草粥雑炊として食べる地方もある。

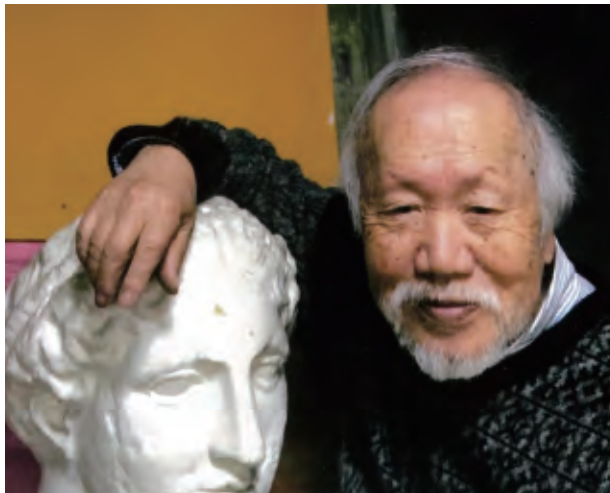
七草粥はお正月のごちそうを食べ、お酒を飲む機会の続くこの時期に、胃腸を休め、免疫力を高めることによって風邪の予防にも繋がることから、多くの家庭でも続けられている。

この行事が行われる麻生区役所の構内では、羽根つきやおはやし等のお正月らしさに溢れた催しが行われ、市民の間にすっかり定着した行事となっている。

創立40周年の記念事業は、こうした経験と麻生区固有の資源を活かし、多くの市民が楽しみ、体験できる事業として新たな発信ができれば素晴らしいと思う。

顧問

## 佐藤 英行



### おだやかな街麻生区

1982（昭和57）年に麻生区文化協会として誕生して以来、何もない何も起こらないそんなおだやかな街で、昔から封建的な人達が住み長く発展を拒み、そこに文化人が入り込んでコラボレーションして美味しい街が出来てきました。そのような街だからゆとりが生まれ文化芸術に興味を持った人々が集まって40年になりました。

麻生区は文化芸術活動が盛んに行われています。文化センターを中心に映画大学、昭和音楽大学を始め、絵画、デッサン教室、彫刻展、陶芸、草木染、文化部ではアカデミー、俳句、コーラス、洋舞、邦楽、吟詠、ダンス、料理と多種多様に楽しんでいます。

なかでもアルテリッカ美術展は、文化協会と美術家協会の共同美術展で今年で一六回展となります。美術家協会は各公募団体に所属している作家が多く、ジャンルに拘らず30名が力作を発表しますので楽しみにしている人達が沢山おります。毎年1600名以上の入場者になります。

そんな高齢者が住む街、自然環境がある麻生区が日本一の長寿の街になったのでしょうか。文化人類学者の西江雅之先生が言われる「文化人」とはこのような人達が集う街なのかと思います。

## 顧問

### 北條 秀衛

#### 麻生区文化協会～昨日・今日・明日～

麻生区文化協会 40 周年。「あの日から、まだ 40 年か」「え、もう 40 年か」思いは様々であろう。「長かった」「あっという間だった」。携わった時代や内容によって感慨は異なるであろう。

私は麻生区文化協会の母体である多摩区文化協会の創立時からなので、およそ半世紀にわたる長いお付き合いである。創立時の藤田親昌会長から箕輪・杉本・京・菅原の各会長、そして現在の板橋会長と公私にわたりご厚誼を頂いており、どの会長との思い出も数限りなくある。天文、郷土史、文芸、コーラス、邦楽、地方（市民）自治と文化、それぞれが専門とするフィールドを深化させる中での文化協会の発展。また、個々の会員のフィールドに自らを同化させながらの調整。バランス感覚に溢れた忍耐強い指導力。頭の下がる思いである。

東京の隣接地で長い間農業が営みの主力であった麻生区であるが神社仏閣、歴史的遺構や遺物、民俗、無形文化財など後継に残す文化も多い。新しい時代の息吹や時代を先取りした、新たな活動も活発に展開されており、それらを育みながらレガシーとして残す活動も要請されている

次の 40 年を見据えた新百合ヶ丘の新しいまちづくり方針が川崎市から提案されているが、交通結節点とともに大きな柱となっているのが「芸術・文化のまちづくり」である。老若男女誰もが分け隔てなく文化・芸術を享受でき、豊かな生活をおくれる町、そんな町こそ「長寿日本一」にふさわしい。是非とも「長寿日本一」を連覇したいものである。

麻生区文化協会の果たすべき役割は大きく、また多くの区民がそれを期待しているのである。

## 専門委員

### ふじた あさや



#### 日本文化は縦割り？文化協会も？

数年前まで私は、児童劇の世界組織〈アシテジ〉の、副会長をしていた。毎年、世界各地で開かれる会議に出席しては、各国の児童劇を見て回り、児童劇が生まれる現場も比較して歩いた。その結果、いろいろなことが分かった。

一番衝撃的だったのは、日本では文化が縦割りだったことである。日本では、演劇の練習場のことを、稽古場という。〈稽古〉とは、〈古（いにしえ）を考える〉という意味で、この言葉が文献に初めて現れたのは「古事記」である。これを芸能の言葉にしたのは、能楽の世阿弥である。その後発生した歌舞伎を、為政者の思うままにするために、新作を禁止し、先祖伝来の演じ方を踏襲するべきだとした。これ

で稽古によって芸が受け継がれていくという伝統芸能のありようが、日本芸能の主流となった。歌舞伎だけではない。語りも歌も、舞い踊りまでが、先祖伝来であるべきだとされた。当然、昔の型を知っているものが、稽古場をリードすることになる。

稽古場とはそういう厳かなものだという常識が、伝統芸ではない現代芸能も支配することになる。

稽古がこのような縦割りだと、教わる方はいっサンプルを求めがちになり、教える方はいっお手本を示しがちになる。これが繰り返されていると。お手本に忠実であることが、成果の良否を判断する基準になる。その結果、日本では文化は受け継ぐものであり、創ることが二の次にされる。現代芸能ですら、演劇はフランスやロシアにサンプルを求め、ミュージカルはアメリカにサンプルを求めている。

世界の国々では、文化には縦割りもあれば横割りもあって、他分野との横の交流で新しい文化が生まれている。その点川崎では、麻生区では、今年 40 周年を迎える麻生文化協会ではどうだろうか？

川崎市アートセンターを拠点に、縦割りの強制力を排除した市民劇の「劇団わが町」をやりながら、私はそんなことを考えている。

専門委員

笠原 登（笠原 秋水）

「新しい風」の展開

まど・みちおさんと初めて言葉を交わしたのは、2004 年の秋でした。その日は 20 周年記念の麻生区文化祭。私が大書した「風・音・こども」のタイトルが会場にかかげられました。川崎市民のまどさん夫妻をご招待して多彩なイベントの幕開けでした。

第一部は「まど・みちおの世界」。童謡と朗読、舞踊と演奏の舞台です。私は朗読を任されていました。「まど・みちお詩集」から 2 篇を選んで当日を待ちました。

オープニングは、地元の小学校 3 年生たちが歌うまどさん作詞の童謡。幕の前に 2 列に並んだ子どもたちに若い女教師が注意します。みんな姿勢を正します。先生が引っ込むと、すぐおしゃべりが始まります。また先生が出てきて整列する。こんなことを 3 回も繰り返したのです。

最前列に座られて、私とその様子を目にされたまどさんが、つぶやくように私に伝えた言葉は――「どうして子どもをあるがままにしておけないのかな。自由に動いて待っている、それが自然で子どもらしくておもしろいのに」。

まどさんの子ども達へのやさしいまなざしに私の心が揺れ動きました。それとなく問いかけてみました。

「まどさんはご自分の詩で、好きな作品は何でしょうか」

「みんな、すぐ『ぞうさん』っていうけど、ぼくは『びわ』が 1 番好きだよ」

私は一瞬はっとしました。朗読する 1 篇に「びわ」を選んでおいたからです。まどさんの詩の根幹には、全ての命を慈しむ愛が流れていることを直感しました。

20 周年記念イベントは、まさに文化協会活性化をめざす新しい風の起点となりました。

これからの文協活動に望むことは次のことです。

活動の現況が各部の年間行事を中心としたパターン化傾向にあります。これを打破するフレッシュな発想が求められる時です。

そのために、ふるさと麻生の歴史性と郷土性を重視することです。この地の自然と生活文化の特色を誇り伝え続ける企画が必要です。その具現化が新しい風の想像を鼓舞する原動力になるからです。

子どもや若い世代が集まる麻生区文化活動の実現を期待しています。

びわ

びわは

やさしい きのみだから

だっこ しあって うれている

うすい 虹ある

ろばさんの

お耳みたいな 葉のかげに

びわは

しずかな きのみだから

お日(ひ)にぬるんで うれている

ママと いただく

やぎさんの

おちちよりも まだ あまく



まど・みちおさん（95 歳）ご夫妻とご一緒に  
平成 17 年 10 月 30 日  
川崎市麻生区市民館にて

## 専門委員

### 山室 茂樹



麻生区文化協会創立 40 周年おめでとうございます。

父である山室静が創立委員の一人だった麻生区文化協会、父が創立に拘る会議に出席する時は、必ず私が父を車に乗せて連れて行ったものでした。あれから 40 年ですか。早いものですね。

ちょうどその 40 年前、私は俳句を始めたので文化協会の俳句大会には必ず参加して参りました。大会に参加して入賞することは大き

な喜びではありましたが、もっと嬉しいのは俳句を通じて多くの友人にめぐり会えたことです。現在、親しく付き合っている友人の多くは、俳句を通じての友人です。俳句さん！ありがとう。

俳句以外で興味があるのは「美術工芸展」ですね。これには多くの友人が出品しているので、作品を通じて友人達の成長を実感できるのは嬉しい限りです。

私のもう一つの趣味は囲碁です。大学入試への挑戦中に覚えた囲碁は、たちまち私を「虜」にしました。新宿の碁会所で楽しみました。当時の柿生碁会所には強豪が多く、関東地方の碁会所大会で 2 位となったほどでした。しかし、近ごろの麻生区には囲碁を打つ人が少く、囲碁を教える教室を開こうかと考えています。

皆さん！俳句・囲碁に限らず、楽しい趣味を持つことは人間的成長にもつながることと思います。何か楽しいことを見つけて挑戦して参りませんか。囲碁を習いたい方がおられましたら、私に TEL してください。

## 専門委員

### 志村 幸男

川崎市制 100 周年、麻生区文化協会 40 周年と、共にお祝いを迎えました。

私は、当会 20 周年時、杉本会長の下、副会長を務めさせて頂きました。美術家協会の一員として、美術工芸部に所属し会に携わって参りました。そして川崎市と川崎市教育委員会との共催による「夏休み親子教室」の担当として墨絵の指導をしております。小学校 3 年生から 6 年生を対象に、墨絵はとつき難い面もありますが、やってみると面白さに気付きます。

参加者が少ないかと心配しましたが、定員 20 人のところそれを越える応募で安心しました。会場は、私共の会館を使用しています。座卓に正座の寺子屋スタイル、9 時半から 11 時半の約 2 時間で作品を仕上げます。先ず墨絵の説明、筆の運び、墨を付けての練習と進めます。墨は、私が予め墨磨り機で磨った墨を使います。とするのは今の学童の硯は、墨汁用の皿だけのプラスチック製の物が多く磨れない者が出てしまうので。題材は、夏に困んだ、くだもの・野菜・海・虫などです。予め私が描いたお手本の絵の写しを渡しそれを

基に描いてもらいます。練習を重ねた後に、作品は画仙紙に描かせます。何枚か描かせ出来の良い作品を色紙入れに入れ皆に発表します。自信たっぷりに見せる人、恥ずかしそうに見せる人、様々ですが、皆達成感を見せ満足そうな様子。墨絵の楽しさを少しでも伝えられたかなと思います。

終わって次は、スイカ割り。私が栽培したスイカを、目隠しして棒を持ち割らせます。当たると大歓声、緊張が解れ、皆が 1 つになり、思いっきりスイカを食べ、夏休みの思い出づくりを終了します。教室をお手伝い頂く会の皆様に改めて御礼申し上げます。

麻生区文化協会の活動が、日本文化の伝承に加え、麻生の郷、歴史をなどさまざまなことを伝える担い手として、今後共発展して行くことを願います。



## 麻生区文化協会 40 周年記念誌編集委員会

## 参加者

板橋 洋一（進行）、伊藤 胡桃、井上 俊夫、小田島 寛、木村 幾子、佐藤 勝昭、菅原 敬子、橋本周、横川 博行、横須賀 朝子（五十音順、敬称略）

## はじめに

板 橋： 本日はお忙しいところ、お集まりいただきありがとうございます。1976年11月に麻生区文化協会が設立されて昨年11月で40周年を迎えることになりました。この間、10年ごとに記念誌を作成し、活動のまとめを行ってきました。その意味で本日は、30周年から40周年、2015年から2024年、元号でいくと平成の最後の4年間と令和に入った6年間ということになります。この10年間に絞り、お話ししたいと思います。

記念誌を編集するにあたり、企画の段階からみなさんにご意見を伺い、会員や区内の各界の方々からお話を伺ったり、寄稿していただいたりしました。また団体会員、個人会員の方々からアンケートをとるなどしてきました。

そのまとめの段階になり、あらためて編集委員会のみなさんからご意見をお聞かせいただきたいと考えています。

テーマは大きく分けて2つ、はじめにこの10年を振り返って、文化協会の活動だけでなくそれぞれが行われている文化活動を通してご意見を伺いたいと思います。とりわけこの10年の中では新型コロナウイルスによって大きく活動の制約があったかと思いますが、記念誌にお寄せいただいた中にはあまりそのことが記載されていません。

考えてみれば、活動していなかったことの報告はできないわけですので、この座談会ではみなさんもコロナ禍の中いろいろな工夫をされていたことと思いますが、そのことに触れながら、ご意見を伺えればと思います。

2つ目は、文化協会のこれからについて伺います。アンケートの中間集約がありますが、やはり活動を進めるにあたって、会員の高齢化、減少、役員の成り手が少ない後継者がいないといった課題が共通されているように思います。

また、今後の対応として、若年層へのアプローチ、情報提供の迅速化が多く求められました。そして、編集委員会では今後の方向性として、外国人などに向けた多様化ダイバーシティや国際化、地球温暖化などの環境問題への取組が必要だという意見がありました。

そして、麻生区特有の課題としては、横浜市営地下鉄3号線の新百合ヶ丘駅への延伸計画による再開発への期待も寄せられています。そのようなことを踏まえて、それぞれお話ししていただきたいと思います。



伊藤 胡桃

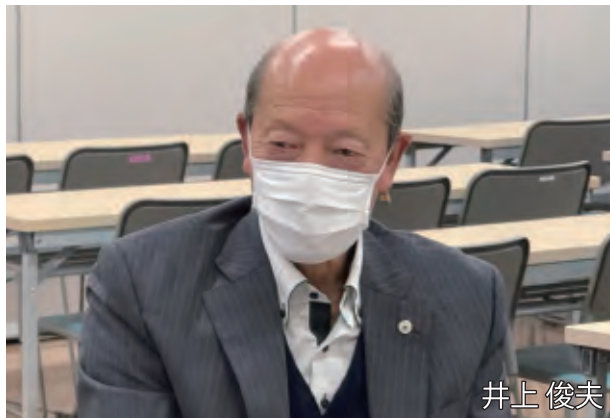
伊 藤： ダンス活動をしていることから、文化祭などの行事をするかしないかということが一番の懸念でしたが、みなさんやっぱり積極的に前を向いていこうということで実行することになりました。もちろん開催にあたってはこれ以上ないくらいの注意を払いました。

普段は不特定多数の方が来場するのですが、特定の方にして隣に座った人が分かるように連絡がとれるような形にしました。

そしていろいろあった約束事を守れるように行いました。結果として、そのことが自信になりました。

またこういうことが絶対ないとはいえませんが、自分はちゃんとできるんじゃないかという自信ですね。

個人のスタジオでは閉鎖しなければならなかったのですが、レッスンでみなさんの気持ちをつなげる努力をしたり、大きな支障はなかったと思います。ほかのスタジオでも大きく変わったことはなかったと思います。



井上 俊夫

井 上： 寺子屋で子どもたちに教えるというのは対面が大事なんです。でも、コロナ禍を通じて IT 化が進みました。例えば ZOOM などを使ってその代わりにしました。これからはそういう方向に代わっていくのだろうという感じがします。コロナが終わって、ZOOM は使わなくなったので一時的なものかもしれませんが、やはり文化協会も方向性は IT 化かなと思います。

リモートやスタジオを使ったり、ハイブリッドになっていますね。遠距離でもつながりますし、他に用事があってその場に来れない人も参加できますし、必ずしも全員が集まらなくてもいい。

伊 藤： スタジオでも、1 ヶ月間リモートでレッスンをしたりしました。

板 橋： 中高年の方には IT 化が進むことに抵抗感があったり、なじまない方があると思いますが、やはり使っていった慣れるしかないですね。



菅原 敬子

菅 原： 会長として文化協会としてコロナ禍にどう対応するかを考えました。コロナ禍でいろいろな制約がありましたが、休むことはない。文化協会の活動をなすとならないようにしようということにしました。どの部会もそれぞれに工夫して、いろいろな対策を立てて努力してくださって、すごく嬉しかったです。

その結果、活動が途切れなかった。他の会では音楽活動などがつぶれて、再開しようとしてもできなかったということを聞いていますが、一度やらなくなったら、もう一回集まってやりましょうといっても難しいですね。麻生区はそうしなかったことで今の活動につながっています。

板 橋： 会長という会を運営するという立場で継続していこうという判断が大事だったということですね。

木 村： ちょうど病気を患ってしまして、文化協会の活動も笠原先生のお手伝いをしながら、ぼちぼちと関わっていました。二、三年前から治って活動を再開しました。



横須賀 朝子

横須賀： 麻生フィルは2023年に結成40周年になるので、それに向けて動こうとした矢先に緊急対策ということでホールが使えなくなって演奏会を中止にしました。次の演奏会は違う企画になっていましたが、中止したものをやってつなげていきました。唾などが飛散しないように、管楽器はマスクをつけてはできませんが、譜面台にシールを貼ったり、唾受けのものを置いたりするなどいろいろな工夫をしてその後の演奏会はすべてやれて、40周年記念演奏会もちゃんとやることができました。

その時に、みんなで集まってやるのがこんなに楽しい、中止になった後に練習が再開した合奏がこんなに楽しいんだと感じました。一人でやるよりみんなでやるのがとてもいいんだと実感しました。

コロナ禍まで会場は自由席だったのですが、指定席にして席をひとつづつ空けて半分にするとかいろいろ工夫をしました。

今でも練習の時にマスクをつける人がいたりしますが、完ぺきに元にもどりましたね。

板 橋： 橋本さんは総務として大変だったと思いますが。



橋本 周

橋 本： 会長がどういう判断をするかが大事なことだったと思います。菅原会長がぶれなかった。そのことで会長と総務の関係を非常に密にして、各部会を神経を使いながらサポートしてうまくいったなということでしょうか。伊藤さんも洋舞の舞台の客席をだいぶ減らして努力されたことも見ながら、総務として何ができるかを考えました。文化協会の方々には敬意を表したいと思います。

事業としては、親子教室や七草粥、俳句大会に主として関わってきましたが、それぞれが三密を避けようということで神経を使いました。七草粥では、区役所や保健所が厳しくなりましたね。お粥を提供できない時は、それまでの歴史をたどったパネルを作ったり、映画大学の協力を得てYouTubeの画像を作ってSNSに載せたりしました。そういえば、その時の画像を見て、多摩区から二人の若い女性が今年の七草粥に来ました。嬉しかったですね。

親子教室は、当初は17くらいの講座があったのですが川遊びにしても和光大学と区役所が開催し、同じような企画を地域の学校とか区役所や市民館など、また業者がやったりして重なりました。文化協会が種まきしたのだと自負しています。

先程井上さんが教室なども大事だといっていました、映像とかもね。文化協会がそういう道筋を作ってきたと思っています。

講座の内容も変わってきました。佐藤勝昭さんが科学教室を始めて、井上さんが新しくパソコン教室を開

催されたり、陶芸お手玉作りなど手のかかるものはやめてしまったものもありますが、踊りやお琴、書道、水彩画など伝統文化を子どもたちに伝えていくことも大切です。

コロナの時もいくつか中止にしましたが、対象がお子さんですから三密を避けるなどいろいろな工夫をそれぞれにお願いしました。



小田島 寛

小田島： 写真部を含めて美術工芸部では、幸いにもコロナの時期もいつもと違うような変化は無かったように思います。とはいえ、お客さんが来場する展覧会では、三密を避け、アルコール消毒や、換気扇を回すなどの工夫はしましたね。

市民館のギャラリーは、通り道だという扱いで規制は少なくても多少は良かったのですが、お客さんの中には会場内でおしゃべりが多くマスクをしているとは言えハラハラしました。民藝さんの協力で実施するデッサン会では、大会議室ですが、常連さんが多く感染防止にも協力的で安心して実施できました。話はそれますが、サロン部で行なった岡部信彦先生のコロナ対策の講演会は良かったですね。優しい語りで分かりやすく勉強になりましたし、話を伺って安心もできました。

菅 原： 川崎市の専門家であるだけでなく、国のアドバイザーやNHKなどのテレビでも活躍された方ですね。

俳句は「座の文学」とも言って、人が集まってやるのが基本で、小さな

横 川： グループで集まって句を作って楽しむものなんです。コロナの時期ZOOMを使ったりしてみました、その仲間に使えない人がいるとできないんです。俳句界を構成している各結社の団結が崩れてきていて世の中の変化についていけないようなところがあるんですね。

また俳句をする人が高齢化してきて継続することが困難になってきました。会長が継続してやりましょうというので、俳句大会は継続しましたが、危ないから二年間当日句会はやめました。俳句講座の回数は減らし、金子兜太さんや馬場あき子さんの映画上映会など工夫をして続けてきました。

プレバトなんかで俳句がもてはやされていますが、実際はいくつもの結社がなくなってきました。新しい人が入ってこなくなっちゃったんです。小学生の俳句大会もコロナのこともあるのですが、学校の協力も得られなくなってきた、やめてしまいました。投句の葉書に書かれた絵の展示会も良かったんですが。俳句は教科書にもあったのですが、今は短歌に代わってきているようです。

## これからの文化協会は

板 橋： 皆さんにこの10年を振り返っていただき、特にコロナ禍におけるさまざまな工夫や対策などで苦労されたことがわかりました。その対応が今でも引き継がれたものもあれば、完全に元に戻ってしまっているものもあるようです。

進行の得手不得でもう時間が限られてしまっていますが、これからの文化協会についてご意見を伺えればと思います。

高齢化、後継者不足、会員減少などの課題もありますが、前向きに若い層にどうアプローチするか、アンケートをみると情報提供を迅速にしてほしいという意見が多くありました。文化協会では、40周年記念事業として、ホームページのリニューアルを進めています。

私が所属する NPO しんゆり・芸術のまちづくりが先日行いましたカフェグランデは、子育て世代にターゲットを絞って芸術や文化を楽しんでもらおうとステージやワークショップなどを行っています。文化協会も夏休み親子教室などを行っていますが、いかがでしょうか。

井 上： 寺子屋などの活動をしていて感じるんですが、文化協会は広報がへたというか、若い人へのアピールが弱いと思うんです。中学生が AI を使って絵を描くとか、油絵でもない水彩画でもない、子どもたちは今、全員がタブレットをもっているわけですから、それをうまく使うとかね。

子どもたちが減ってきている中で、真福寺小学校では、小学校 6 年生が自分の住む地域に移住してくださいというパワフルなチラシを作りました。自分たちの後輩が減っているのを感じているんでしょうね。そんなパワーを文化協会も巻き込んで取り組むと面白いですね。

橋 本： 文化協会では、区役所などがやるような大きなイベントに取り組むことはなかったです。文化協会主催の広く市民によびかけるような事業も今後必要では？

菅 原： 麻生区は子どもを対象にした行事は弱いですよ。子どもフェスタも区政推進会議で提起して初めて取り組んだので、担当が企画課になってしまい。社会福祉協議会や福祉機関が主体的に関わらない。

今、町内会などにチラシを配ってもらうこともできなくなり、広く知ってもらうことが難しい。なので、文化協会って何をしてるところなの、という意見をよく聞きます。バレエや合唱団、美術などを楽しんでいる人が多いですが、文化協会はちょっと入りにくいという声もあります。それぞれの団体会員に頑張ってもらっていただくことが大事ですね。アンケートを読みながら思ったのですが、バレエなどは若い子にはすご

板 橋： く人気がある。とはいえ、それぞれの団体経営もあるし、すぐ文化協会に結びつくかという点と難しいかな。趣味の範囲もありますが、それで生計を立てているところもあるし。親子教室はいいなと思うのですが。

意識の問題だと思う。バレエや音楽、美術にしても、文化協会に入会して何をアピールしていくかという意識が欲しいです。

スマホが普及して現状は変わりました。書くことが面倒だし、字がうまくなる必要はない。そろばんを習って暗算を覚えることもいらない。スマホでできちゃう。そのうち AI を使うので文章を書いてしまうなど、つまり、昔の読み書きそろばんが、いらないという時代になっていきます。



木 村： 書道を学ぶ子どももどんどん減っています。

伊 藤： バレエやダンスの人気はパフォーマンスを見て、衣裳などに魅力を感じることもありますね。

小田島：写真もデジタルカメラが普及して誰にでも簡単に写真が撮れるようになってきましたのでカメラの扱いや撮影技術があまり問われなくなってきました。あとは何を撮るかが問われます。でも、それが一番難しい。つまり感性が大切な問題で言葉にして教えられるようなものでなく、学校の図工や美術でも教師が一番苦労するところです。中学校で美術部の顧問を手伝っていますが、昔からの活動のイメージとは違ってきました。タブレットで情報を得て好きなアニメの今風のキャラクターを描く訳です。色鉛筆を使って見事に描きますので、今度は基本のデッサン力を伸ばそうと指導するが、期待には程遠い。ただ、好きなアニメの模倣でもイラストを楽しむ興味関心は認めたい。真似は学びの第一歩として。その点で、文化協会の役割を考えると、先ほどの寺子屋の活動のように、表現する意欲や好奇心を育むソフト的な場の提供と実際に機器を扱うハードの提供をする担当がタッグを組んで子どもを育てる。大人も子どもも学べる機会があると活性化するのかなと思います。

橋 本：高齢者施設でもいろいろなことを行っていますね。一緒に歌ったり、演奏したりが楽しいのでしょうか。人を集めたり、協力してもらうなど、丸山博子さんの取組み方は見習うものがありますね。これからは、もっと参加型が必要ですね。

発表の場を提供するというのは大きな意義があります。本当はその場を準備したり、運営したりする人が必要なんです。手づくりの場に参加してもらいたいですね。

菅 原：子どもフェスタなんかもね、もう少し関わる人を増やせばよかったかなと。

横 川：俳句大会もどなたかに評価してもらって、賞をもらおうと励みにもなっていて集まってきましたね。



佐藤 勝昭

佐 藤：若年層へのアプローチで、子ども部門をつくるのもアイデアかな。寺子屋と連携したり、黒川の野外センターに協力してもらったりして。一方で、伝統文化を守るということも大事ですね。文化というのは変わっていくものだけれども、伝統文化が寂しくなっている。文化協会は日本文化を外してはダメですね。

橋 本：古風七草粥などはいいい取組ですよ。麻生区の俳句文化は特に高石地区は盛んでしたしね。

他の団体と連携するためには、お金も必要です。文化協会に限らず、行政も文化を守り育てることに予算をつぎこんでほしいものです。

## 連携、参加、IT 化

板 橋：これからの文化協会の活動に向けてみなさんの発言の中からいくつかキーワードが出てきたように思います。連携、参加、IT 化への対応、そして伝統文化をどう引き継いでいくか、そのための予算増など。今日はどうもありがとうございました。

2025 年 2 月 5 日（水）15 時～  
麻生区役所第 1 会議室 B

## 文化祭など

麻生区文化協会は 1984(昭和 59)年に多摩区文化協会を母体として誕生し、はや 40 周年を迎えました。その間、川崎市は新百合ヶ丘を新都心と位置づけ、新しいまちづくりを着々と進めてきました。その新しいまちづくりにふさわしい文化協会のあり方を話し合い、文化協会の基本を次の 2 点におき取り組んできました。

- ① 麻生の地が古くから持ち続けてきた文化的土壌や環境、「伝統的文化」を大切にする。
- ② もう一つの土台として、この地を選び移り住み、暮らしを考えて生活をしている人々の求めている文化的なまち。今すむ人々が造りだしている「創造的文化」を目指していこう。の両面を大切な柱として進めてきました。

このうち、①については、「古風七草粥の会」や、歴史ある麻生区の俳句をつむいできた事を大事に、更に学び広め歴史をつなぐ為の「俳句講座」、子どもたちと共に親御さんを含めて参加していただける「親子で学べる夏休み教室」等、麻生を学び、歴史・地域を学ぶ講習会や学習会などを位置づけ活動してきました。

次に、②については、芸術・文化のまちづくりを柱としての活動です。

(A)「麻生区文化祭」の開催をととして、各部会「文化サロン部」「舞台芸能部」「美術工芸部」「アカデミー部」の発表の場を設定しました。

(B)・美術工芸部・邦舞邦楽団体・洋舞団体・吟舞吟詠団体・俳句大会・「かわさき市民芸術祭」への参加等すばらしい各団体の発表の場の設定です。「麻生フィルハーモニー」の演奏会は文化協会発足時から続けられてきました。

最後に広報のための取り組みについて紹介します。文化協会発足時より発行してきた「からむし」は、文化協会としての活動・個人としての活動・団体としての活動を報告し、広く社会や、会員に知らせるべく発行してきました。

以上、会としての活動状況について述べさせていただきました。

菅原 敬子



## 夏休み親子教室

麻生区文化協会では、2000(平成12)年の「お楽しみ玉手箱」を起源として、2003年度から「夏休み親子教室」という名称で麻生区の小学生とその親を対象にして講座を開いてきました。本会の会員がその特技を活かして子どもたちに、地域に根ざした伝統的な芸術文化に触れてもらうというのが当初のねらいでした。

教室も、はじめは、「日舞」「華道」「茶道」など和風のものでしたが、その後、幅広いジャンルの教室が開かれるようになってきました。

たとえば、2016年を見ると、「紙粘土」「切り絵」「毛筆で名前を書く」「子ども俳句」「お手玉」「絵手紙」「手作りうちわとマーブリング体験」「洋舞」「茶の湯」「鶴見川と生き物」「墨絵」「いけ花」「童謡舞踊」「夾纈染」「和太鼓」「日本舞踊」「楽器を学ぶ」「スマホ顕微鏡」とバラエティに富んでいることがわかります。「鶴見川」は和光大学、「楽器」は昭和音楽大学のご協力を得て実施しました。

しかし、当初600名もあった応募数が徐々に減少し、2019(令和元)年には応募が369名、実際の出席数は237名になりました。これは、大学や地域のサークルなどが、本会と同様の子ども向け教室の企画をするようになったことも一因です。追い打ちをかけたのが、2020(令和2)年から翌年にかけて猛威を振るった新型コロナウイルスの流行で、2年にわたって夏休み親子教室を中止せざるを得なかったことです。2022年再開しましたが、この間に講師の高齢化もあってモチベーションが低下し、開設は13教室にとどまり、参加者も108名と低調でした。

特記すべきは、コロナ後、「プログラミング教室」という講座が開設され、2023年には募集15名に対し34名の応募があったことです。その一方、伝統文化の教室には僅かな応募しかなく、教室の開催が危ぶまれるなど、子どもたちのニーズが時代とともに変化していることを実感しました。IT時代の子どもたちを取りまく環境や初等教育の現状に合わせた講座内容の取捨選択を検討していくべき時期に来ているのではないのでしょうか。なお、役員会では、「親子教室」という名称についても、改称を検討しています。

佐藤 勝昭



鶴見川と生き物



プログラミング教室

## あさお古風七草粥の会

第 21 回古風七草粥の会が、麻生区文化協会創立 40 周年記念の冠称のもと開催された。前夜来の雨で開催が危ぶまれたが、小雨にも拘わらず開会前には 100 人余りの長蛇の列。ところが、開会セレモニーの始まる 10 時 50 分丁度に、突如青空が広がり、新春の陽射しが会場を暖かく包み、あたかもお天気もが 40 周年を祝うが如くであった。

いよいよ、粥の提供が始まると、足早に粥を頂きどなたも幸せそうな笑顔が広がった。一方、会場では、恒例のお囃子・獅子舞、和太鼓や、かわさきカルタとり、童謡を唄う会のコーラス、正月遊びなどが繰り広げられ、子どもも大人も正月気分を満喫している。七草粥の会での「食べて、見て、触れて、感じて」の体験を通して、子どもたちが、昔からこの地に伝えられている伝統行事に親しみ、「ふるさとの心」を育む大切な機会になることを願っている。

さて、少し遡って見ると、昭和 62 年、本会の初代会長の藤田親昌さんが「古風七草粥を食べる会」という名称を提唱、細山の郷土資料館で文化協会役員・運営委員の新年を祝う会として行われていたのが粥の会の始まりである。その後、平成 16 年に、3 代目会長の杉本長治さんと当時の麻生区長による「広く区民の皆さんに参加してもらう麻生の有意義な伝統文化の継承の機会にしよう」との提言を受けて、名称を「あさお古風七草粥の会」として、本会と区役所の協力によって進められ、現在に至っている。

粥の提供は当初 300 食から始めたが、大変な人気で、その後 500 食、そして、800 食と年々増量し、現在では 1000 食が開会后 1 時間余りで終了になる状況となっている。

無病息災を願う七草粥は、今では麻生の正月の風物詩として定着している。中には十数年にわたりスタッフと会うのを楽しみに訪れるという人たちや、YouTube（コロナ期に作成した）をご覧になり今年はじめて参加したとの多摩区の若い女性たちとも繋がり、さらなる広がりを見せている。

また、会の経費は、区役所からの予算により実施できているので、粥は無料で提供しているが、「タダで食べるのはどうも」という多くの参加者からの声にもとづき、会の当日には募金箱を設け、協力と呼びかけている。当初は、恵まれない子どもたちの育成資金として、最近では、自然災害被災者支援金として、「社会福祉法人読売光と愛の事業団」への送付を続けている。

さて、令和 2 年は新年早々からコロナという、なれない感染症の対応に大わらわでした。したがって、令和 3 年 1 月 7 日の第 17 回古風七草粥の会は、やむを得ず中止することとなった。そこで、ピンチをチャンスに変えようと、この会の成り立ち・経緯のパネル展示と、映像（YouTube など）の制作を検討し、前会長の菅原さん、実行委員長の山室さん、副実行委員長の橋本と、区役所地域振興課の担当者、日本映画大学の職員の皆さんの協力の下に動画を完成させ、歴史の 1 ページとして残すことができた。完成したものは、令和 2 年 12 月 23 日～令和 3 年 1 月 7 日の間、区役所ロビーにて、パネル展示とともに、常時映像を流し、多くの区民にアピールした。近年、麻生区には、若い世帯が増加、また、外国人も急増しており、これらの方々が地元で親しみ伝統文化や行事に興味や関心をもって頂くよい機会になったのではないだろうか。



新しい看板（2025 年）



順番を待つ



活動記録の紹介

翌年の第 18 回の会（令和 4 年）は、コロナ禍は続いていたものの、感染対策も多少進んだことを受けて、関係機関と連携し、指導を受けながら、食数を 500 食に限定し、整理券を発行して喫食の人数制により実施すると共に、テーブルで向き合って喫食することを禁止するなど、安全・安心を第 1 に、「三密」に配慮して実施した。心配された感染もなく無事実施できたのは幸いであった。第 19 回（令和 5 年）は、まだコロナ感染状況が刻々と伝えられてはいたが、感染防止対策も進んできたので、取り組みとして、整理券による人数制限（時間制）、向き合い喫食の禁止、800 食の喫食とテイクアウト 200 食の提供などの取り組みを実施した。ただ、テイクアウトの希望が多く、配色担当はてんてこ舞いで、苦労しました。

そして、第 20 回（令和 6 年）は、通常通りの 1000 食提供し、大にぎわいのもと実施することができた。この年にはコロナ感染症が一般感染症の 5 類に組み込まれたことにより、社会一般にかなりの意識変化があり、危機感が緩和されたが、「三密を避ける」、「安心・安全」を合言葉に七草粥の会を慎重に実施した。来場者からは喜びの声が多く寄せられるとともに、能登半島地震被災者支援の募金も非常に多く 9 万円近く寄せられた。

ここ 5 年あまり、コロナ禍に続き、自然災害の被害が毎年の如く相次ぐなど、厳しい時代の到来とも言える。そんな時代だからこそ、伝統文化や行事が途絶えることなく繋がることで、人々を長引いた自粛生活と閉塞感から解放し安らぎの場へ導くという「古風七草粥」が本来もつ「無病息災の願い」が届くことを祈る思いで開催している。

## 橋本 周



子供の玩具や童謡を披露



七草の前で舌鼓



子供の玩具や童謡を披露



炭火で餅焼き



1000 食を支える裏方のみなさん



手際よく配膳する係



片平お囃子保存会

## 文化サロン部

### 10年間の活動

2014年 講師 梶 亨氏  
 テーマ「童謡・唱歌のふるさとを訪ねころを  
 歌おう」映像と解説、  
 真福寺小学校児童の合唱で紹介した。

2015年 講師 川染 雅司氏（昭和音楽大学教授）  
 テーマ「ペテルブルグ＝モスクワ音楽二都  
 物語」二国の音楽の歴史の講演とピアノ演奏



2015年 川染氏

2016年 田園調布学園大学の学生  
 テーマ「もっと知りたい麻生の6大学」  
 学生と参加者のワークショップを開催



2017年 6大学

2017年 麻生区に関係のある大学の学生  
 テーマ「もっと知りたい麻生の6大学」パートII  
 6大学の学生達による大学の特徴を生かした  
 イベント実施

2018年 講師 穴戸 哉夫氏  
 （イルフェジュールケーキ店オーナー）  
 テーマ「かわさきマイスターって知っています  
 か」マイスターに選出された穴戸氏と部長との  
 対談



2018年 穴戸氏

2019年  
 ｝ コロナ禍で中止  
 2020年

2021 年 講師 岡部 信彦氏  
(政府の新型コロナウイルス感染症対策メンバー)  
テーマ「新型コロナウイルス感染症の現状と  
市民生活」感染の現状と対策について



2021 年 岡部氏

2022 年 講師 菊地 恒雄氏 (日本地名研究所事務局長)  
テーマ「麻生区の地名を探る」  
麻生区の歴史から地名を探っていく講演

2023 年  
8 月 講師 原 武史氏 (放送大学教授、政治学者)  
テーマ「小田急線の昔・今・未来」  
沿線のまちづくりと小田急線のこれからの講演



2023 年 千坂氏

11 月 講師 千坂 隆男氏 (文化協会専門委員)  
テーマ自由民権運動と麻生  
小学校の社会科教科書のコピーや地域の古刹や  
住民の方々の貴重な話を元に、  
麻生の自由民権運動の動きをたどった。

2024 年 講師 小川 信夫氏 (劇作者)  
テーマ「川崎市誕生ものがたり」百年への贈り物」  
市政 100 周年記念として公演予定の市民劇の  
見どころの講演



2024 年 小川氏

### 会員の主な活動

各年度のテーマと講演内容を決定 講師の決定と内容等を打ち合わせる。チラシ作成と配布。  
講演会当日の会場準備。司会進行等を行っている。

### その他

現在サロン部は主に 5 名の会員で運営している。これからは若い方々にも会場に足を運んでもらえるような工夫をしていきたい。

富田 宏子

## 舞台芸能部 洋舞

### 2014 年～2024 年の主な活動

10 年がとても早く感じられるのは目まぐるしい社会の変化なのでしょう。洋舞も毎年文化祭、隔年の芸術祭等、来て下さるお客様の期待に応えられる舞台づくりに励んできました。例年早くから開場を待つ列がならび、ホールはいっぱいになります。

この 10 年間を振り返るとコロナのパンデミックにより、2020 年 3 月の第 36 回かわさき市民芸術祭は開催直前に中止となり、上演予定の麻生区合同作品「くるみ割り人形」は積み重ねた準備と共に幻となりました。翌年の 2021 年文化祭は規模を抑え、全席指定、来場者の把握、消毒、マスク等徹底し、できる限りの対策を行いました。出演者もステージ横の机にマスクを置き舞台に出て行き、振付には踊り手たちが離れて動く工夫もありました。緊張の中無事にやり終えた時、コロナで開催の中止や延期が多い時期に実行した責任から解放され、私達は次にまた立ち向かえる自信と安堵感に包まれました。

かつてない経験を乗り越えてできた信頼関係を大切に、現在グループのメンバー（9 団体）が自己啓発しながら共生できる事をととても誇らしく感じています。40 周年記念文化祭では T シャツを作り子供たちが踊る「かがやいて麻生」がオープニングを飾りました。



### 会員の主な活動

|           |                                    |              |
|-----------|------------------------------------|--------------|
| 井上 恵美子    | 2023～2024 文化庁助成 振付作品「家路」を各地において公演  |              |
| 伊藤 胡桃     | 公益社団法人日本バレエ協会                      | 第 9 回舞踊文化功労賞 |
| 吉原 嘉代子    | 公益社団法人日本バレエ協会                      | 第 9 回舞踊文化功労賞 |
| 挾間 祥子     | 文化庁総合芸術育成事業ワークショップ講師 牧阿佐美バレエ団ミストレス |              |
| 大西 まり子    | 国際ダンスコンペティション                      | 最優秀指導者賞      |
| あわた めぐる   | Brilliant Stars バレエコンペティション in 埼玉  | 最優秀指導者賞      |
| 武石光嗣・中澤多喜 | 東京新聞協賛第 9 回とうきょう全国バレエコンクール         | 優秀指導者賞       |

### 所属団体

井上恵美子モダンバレエスタジオ KAZU Pilates&Ballet Studio 胡桃バレエスタジオ  
 シャラモダン・ジャズダンススタジオ HAGA バレエアカデミー バレエスタジオえるとえる  
 めぐるモダンバレエスタジオ 吉原バレエ学園 菊池バレエ研究所  
 各スタジオ主宰者は 2 年に 1 度発表会を開催している。

伊藤 胡桃

## 舞台芸能部 邦舞

### 10年間の活動

30周年記念では浦島太郎を発表致しました。絵本を見ていまして、これは踊りで出来ると思い、脚本を作り会員全員の参加で2時間の舞台が出来ました。

#### 参加者

○麻生童謡を唄う会 30名 ○夏菟太鼓 1名 ○麻生日舞協会 6名 ○新舞踊個人 11名  
○琉舞の会 4名と皆さんの協力があって良い舞台が出来ました。

平成31年は、題材を春夏秋冬で発表致しました。

舞台最後には、平成31年まで麻生まつり唄を客席のお客様と一緒に踊り幕をおろしました。

これまでは門弟の方々が踊っていましたが、令和より二部代表者の踊る部門を作ってから  
はまつり唄の踊りはやめることにしました。

年数を重ねるごとに会員も高齢化になり、客席も少なくなり、これからの事を考えなければなら  
なくなっております。

### 会員の主な活動

文化協会の行事に参加致します。

七草粥、親子教室、市民芸術祭、区民祭りパレード、桜祭り

### その他

多摩区文化協会で10年。

麻生区が出来た時、20万円をいただき麻生区文化協会を作ってくださいと促され、初代会長の藤  
田親昌先生と作りました。多摩および麻生区文化協会にたずさわり50年になります。

一言そえました。

## 中島 邦子（坂東 千寿美）



## 舞台芸能部 吟舞・吟詠

◆詩吟が文化協会文化祭で発表披露されたのは平成3年度の第7回文化祭においてでした。

当初は詩吟グループが5団体の参加でしたが、平成4年度には7団体となり平成5年・平成6年と続いて参加しました。

平成6年度は文化協会創立10周年を迎え、11月5日の式典に先だち祝の詩吟が吟じられました。

平成7年度は「紫水流一多摩紫峰会、紫水会一紫乃春会、日本の吟道学院多摩美会、日本詩吟学院岳総会、日本詩吟学院聖吟会、日本吟道学院緑伸会」の6団体となり、「日中の四季を詠う」をテーマに103番を春夏秋冬に分け吟じました。

平成8年度も6団体で開催、平成9年度「自然と人生を詠ず」をテーマとして88番が吟じられました。

平成10年度は日本吟道学院多摩美会が脱退し、新たに蒼神流が加わり、剣舞・舞踊が披露されました。第二部のテーマは「雪、月、花」でした。平成11年は6団体テーマは「春夏秋冬」、平成12年6団体「ふるさとを讃う」で地元をテーマにしました。平成13年は5団体テーマは「秋の祭典」で秋の詩を吟詠、平成14年は岳窓会が他大会と重なり参加できず4団体で挙行、平成15年は「漢詩で四季を詠ず」をテーマとし小学生3名も出吟し、106番と多くの参加がありました。

平成16年度は20周年を祝して箕輪敏行先生が作詩し吟詠されました。

◆20周年から30周年にわたる10年間の活動は代表の先生方が4人も故人となり文化祭の開催は大変でした。しかし各団体の協力により朗詠も多彩に展開され第30回吟詠大会を迎えることができました。

平成26年11月2日新しい会員北川岳瑋先生のご挨拶で4団体86番が吟じられ、吟舞・剣舞等が各会派から披露され盛り上がった会となりました。

令和5年の文化祭、第39回吟詠大会には「秀風吟道会」が多くの会員と共に加わり元気づけられると共に大いに盛り上がりを見せました。

今後も若い方々の参加を進めるなど知恵を絞って、漢詩や現代の新作詩等幅広い内容を展開したいと思います。高齢者も大声で元気に吟じることが、ぼけ防止、健康増進につながると共に詩を覚えることも老化防止につながることから、一層会員の増強に向けていこうと思います。

正岡 皎



## 舞台芸能部 麻生フィル

### 2014～2024年の主な活動

麻生区文化協会が創立 30 周年を機に「あたらしい風と創造」を掲げたことで、麻生フィルも演奏会の指揮やソリストに若い方に来ていただくことが多くなりました。

2014 年の「ファミリーコンサート」では演奏会のテーマに沿って「かがやいて麻生」をラテン風に演奏、秋の演奏会では若い指揮者、ソリストをお迎えして演奏会を実施、大成功でした。

その後順調に演奏会を重ねていましたが、2020 年にとんでもない事態になりました。

新型コロナ感染拡大により外出自粛要請を受けて、4 月の定期演奏会は中止、その後も緊急事態宣言により公共施設利用制限がでて、夏の音楽祭も中止。

その後、イベント活動の制限が徐々に解除されたので、麻生フィルもいろいろな対策をして活動を再開、2020 年秋の文化祭における演奏会は無事開催できました。

2022 年は麻生区 40 周年ということで麻生区のキャラクター「かきまるくん」にも参加してもらい「ファミリーコンサート」を開催、とても盛り上がりました

2023 年は麻生フィル創立 40 周年で、マーラーやブルックナーの大曲に挑み大成功！

これからも「芸術・文化のまち・麻生」を盛り上げていきたいと思っています。

横須賀 朝子



## 美術工芸部

麻生区文化協会の美術工芸部では、毎年引き継がれてきた以下の取り組みがあります。

- 1 劇団民芸の女優さんを描くデッサン会
- 2 美術工芸展（麻生区文化祭）
- 3 かわさき市民芸術祭への参加
- 4 アルテリッカ新ゆり美術展の共催、参加

### 1 「劇団民芸の女優さんを描くデッサン会」の企画

新年度がスタートして6月頃、文化協会として最初に開催されるイベントのため、劇団民芸と前年度から連絡調整を進めるとともに、担当の係がこれまでの参加者を中心に案内を発送して周知を図ります。

例年、40名を超える参加申し込みがあり、民芸からは舞台衣装の二名のモデルさんが、会場の市民館大会議室にて、2か所に分かれてポーズをとりデッサンが始まります。毎年参加する常連さんが多く、思い思いのところに場所を確保して開始を待ちます。初心者の方には、美術家協会会員による手ほどきも受けられます。

また、ここで生まれた作品は、翌年春の「アルテリッカ新ゆり美術展」に出品することができ毎年好評を得てきました。



### 2 「美術工芸展」（麻生区文化祭）の企画

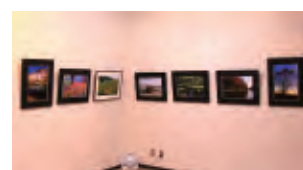
秋の文化祭イベントとして10～11月に開催する作品展です。

美術工芸部に所属する、絵画・書・写真・工芸・彫刻・絵手紙の各分野で日々制作に励む会員が、思いを込めた作品の発表の場として引き継がれてきました。市民ギャラリー会場入り口には生け花協会の有志による迎え花が添えられ来場者の心を癒してくれます。

幸いなことにコロナ禍でも作品展を中止することなく例年通り開催してきました。市民館からの要請もあり、来場者の感染予防に配慮し換気や3密防止、アルコールの準備などを励行し継続してきました。

しかし、時代の傾向とはいえ会員の高齢化は避けられず、この10年の間にも、これまで意欲的に作品を発表し文化協会の伝統を支えていただいた諸先輩が退会したり病に倒れるなど、この3年ほどは徐々に会員数の減少が続き残念な状況です。後に続く会員としては、40年の伝統を引き継ぎ、造形の魅力を伝えるための活動を通して、新たな仲間の加入を勧めたいところです。

同時期に三階のウォールギャラリーでは、書の秋水展が開かれてきました。

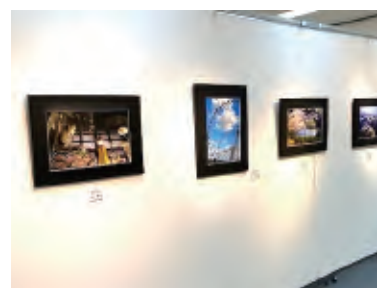


## 3 「かわさき市民芸術祭」への参加

例年2月初旬に市総文連主催による「アートガーデンかわさき」で開催している市民芸術祭・美術部門の作品展です。市内各区の文化協会に所属する会員が華道をはじめ絵画、写真、手工芸、彫刻、フラワーデザインなど、130名を超える会員の作品が公開・発表される唯一の展覧会となっています。

川崎駅ビルに隣接する会場は、麻生区からはやや遠方になりますが、絵画・写真・書・工芸などの部門に20名ほどの会員が参加しています。会場のギャラリーは、広く明るい照明設備も整えられ、多くの市民が訪れ、彩り豊かな華道の作品が来場者を迎えています。

また、会場内にお茶席が設けられ希望者に振舞われていました。川崎市長も来場する大きなイベントです。



## 4 「アルテリッカ新ゆり美術展」の共催・参加

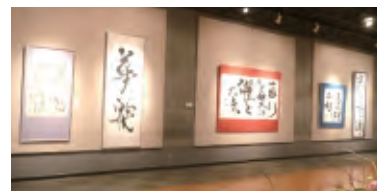
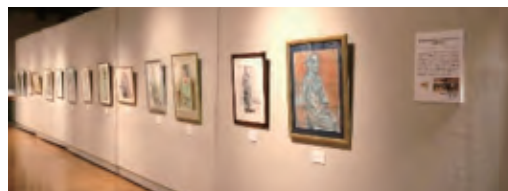
川崎・しんゆり芸術祭プレイベントとして絵画・彫刻・工芸・書・写真・生け花の力作が披露されてきました。恒例の「民藝の女優さんを描くデッサン会」の作品も展示されてきました。

例年3月初旬から一週間、新百合ヶ丘北口駅から歩2分の新百合21ビルのホールにて開催してきました。美術家協会、文化協会の代表で組織する実行委員会と（公財）文化財団の合同主催で、3回の実行委員会にて広報や運営を協議して開催されます。会場は、麻生区美術家協会に所属する作家の作品と文化協会会員の二つに分かれて展示されています。

入り口付近には、麻生区生け花協会の各流派に所属する皆さんが、二日前から集まり、話し合い合同で創作したひとつの大きな花木の作品が参観者を迎えてくれます。異なる流派の皆さんによる作品が鑑賞できる機会は麻生区ならではの特長であり毎年注目されてきました。

初日には、毎年来賓をお招きしてオープニングパーティーが開催されてきましたが、コロナ禍以降中止が続いています。

ホワイエには川崎ジュニア文化賞の作品や区内の高校生による作品も展示されるなど、年齢の幅広い作品を鑑賞できる異色の展覧会として、麻生区内外から多くの来場者をお迎えするイベントとなっています。毎年一週間で、1500名を超える来場者を記録してきました。



小田島 寛

アカデミー部

俳句大会

地域の俳句の盛んな風土に着目し文化祭のメインイベントの一つとして誕生した麻生区俳句大会は今年で第 36 回を迎えた。  
※第 32 回、第 33 回はコロナ禍の為、当日の席題句会は行わず、第 32 回は電子紙芝居『カラスの天国さがし』（佐藤英行画伯）の上映、第 33 回には俳人・栗林浩氏による『俳句を楽しむ、難解句の話』の講演が行われた。  
席題句会は第 34 回から復活した。入選句集は毎回発行し、俳句大会への全応募者、選者、関係先へ配布している。

俳句大会小学生の部

麻生文化協会創立 30 周年にあたり、平成 26 年俳句大会に小学生の部（麻生区内小学校 17 校の 5 年生を対象、一人一句）を設立したところ、各校の協力もあり、26 年の第 1 回 378 句、以後第 2 回 313 句、第 3 回 364 句、第 4 回 339 句、第 5 回 469 句、第 6 回 457 句の応募があり、優秀句には賞状を渡し、応募者には全員の句を収録した「小学校五年生俳句大会作品集」を配布した。  
また麻生区役所ロビーにおける「夏休みの絵の描かれた俳句大会応募はがき展示」には来場者も多く、好評であったが、コロナ禍における活動の制約から、令和 2 年には小学生の部は中止のやむなきに至り、その後も再開への諸環境整わず残念ながら令和元年の第 6 回が最後となった。

俳句大会実行委員長

第 26 ～ 28 回 本玉 秀夫・第 29 回～ 35 回 山室 茂樹・第 36 回 横川 はっこう

俳句講座

アカデミー部では教養を深め、俳句に関する知識を広げ、俳句の楽しみ方を学び、また俳句力の向上に役立つ講座を企画・実施してきた。

横川 博行

| 麻生区俳句大会 応募句数・市長賞入賞作品など（第 26 回～ 36 回） |             |      |                 |        |
|--------------------------------------|-------------|------|-----------------|--------|
|                                      | 大会日         | 応募句数 | 川崎市長賞           | 作者     |
| 第26回                                 | 平成26年11月9日  | 622  | 木に習ふ木地師の枝や秋澄める  | 篠田 きく江 |
| 第27回                                 | 平成27年11月1日  | 538  | 折鶴の声なき祈り原爆忌     | 本玉 秀夫  |
| 第28回                                 | 平成28年10月23日 | 538  | 千枚を一撫でしたる青田風    | 岸本 洋子  |
| 第29回                                 | 平成29年10月22日 | 508  | 目が先に味見している夏料理   | 岸本 洋子  |
| 第30回                                 | 平成30年11月4日  | 494  | 待つほどに闇の整ふ薪能 *   | 水野 盛雄  |
| 第31回                                 | 令和元年11月3日   | 498  | 大空の縫ひ目のやうに鳥渡る   | 池内 英夫  |
| 第32回                                 | 令和2年11月1日   | 478  | 村人になりきってゐる案山子かな | 橋本 周   |
| 第33回                                 | 令和3年10月30日  | 462  | 夕焼けを使ひ切るまでバット振る | 池内 英夫  |
| 第34回                                 | 令和4年10月22日  | 468  | わが影を地面に焦がす暑さかな  | 川田 潔   |
| 第35回                                 | 令和5年10月21日  | 439  | 麻生川風が舵取る花筏      | 大橋 政雄  |
| 第36回                                 | 令和6年10月19日  | 474  | 八十路にもときめきありて落し文 | 梅野 威彦  |

( \* 30回記念特別大賞句 )

俳句講座 日程・講師・演題・映画タイトル

|                                                |                                                          |
|------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|
| 平成26年度 8月26日/9月2日/9月9日                         | 平成27年度 8月25日/9月1日/9月8日                                   |
| 1. 山崎 裕子「りいの」編集長<br>『暦の構造と季節感』                 | 1. 斎田 仁 「麦」同人<br>『国定忠治と小林一茶』                             |
| 2. 復本 一郎 俳人・俳句論史・神奈川大学名誉教授<br>『子規は芭蕉から何を学んだか』  | 2. 松本 悦昭 「さざなみ」同人<br>『歴史を歩き、句を作り』                        |
| 3. 馬場 身江子「さざなみ」同人会長<br>『地生えの俳誌・さざなみとその周辺』      | 3. 千葉 茂樹 映画監督 「日本映画大学」<br>『命を守る勇気・マザーテレサに学ぶ』             |
| 平成28年度 8月30日/9月6日/9月13日                        | 平成29年度 8月29日/9月5日/9月12日                                  |
| 1. 馬場 秀 「希望」主宰<br>『俳句雑学「旧暦と新暦の話」』              | 1. 吉田 功「神奈川県現代俳句協会」会長<br>『現代俳句について』                      |
| 2. 佐藤 重直 映画監督<br>『わが映画人生』                      | 2. 本玉 秀夫 「きたごち」同人<br>『俳句革新の五俳人と俳句史』                      |
| 3. 酒井 弘司 「朱夏」主宰<br>『戦後俳句のことなど、私の出会った俳人』        | 3. 熊谷 仁士 昭和音大オーケストラ事務局長<br>『音楽を通して学んだこと』                 |
| 平成30年度 8月28日/9月4日/9月11日                        | 令和元年度（2019年度） 10月8日                                      |
| 1. 池之上 輝夫 「さざなみ」同人<br>『卒業生に贈る言葉・時の人への取材を通して』   | 1. 映画鑑賞と解説<br>映画『天地悠々・兜太俳句の一本道』上映<br>(俳人・金子 兜太のドキュメンタリー) |
| 2. 横川 はっこう 「八千草」副主宰<br>『蕪村の魅力・その画業と俳句』         | 解説・ゲストトーク<br>河村 厚徳監督                                     |
| 3. 対馬 康子 「麦」会長・現代俳句協会副会長<br>『現代俳句の創造、中島斌雄について』 | 酒井 弘司「朱夏」主宰・「海程」創刊同人                                     |
| 令和2年度（2020年度）                                  | 令和3年度（2021年度）                                            |
| 中止（コロナ禍のため）                                    | 中止（コロナ禍のため）                                              |
| 令和4年度（2022年度） 9月13日                            | 令和5年度（2023年度） 7月24日                                      |
| 1. 山田 貴世 「波」主宰<br>『俳句の力』                       | 1. 映画鑑賞 アートセンター貸切上映<br>『歌人馬場あき子の日々・幾春かけて老いゆかん』           |
| 令和6年度（2024年度） 9月10日                            |                                                          |
| 1. なつ はづき 「現代俳句協会」研修部長<br>『AI俳句と俳句のこれから』       |                                                          |



| 2015(平成27)年度         |             |                |
|----------------------|-------------|----------------|
| 事業                   | 実施月日        | 摘要             |
| 定期総会                 | 4月18日       | 大会議室           |
| デッサン会(第31回)          | 5月31日       | 参加者49名         |
| 夏休み親子教室              | 7月～8月       | 全17教室(参加者359名) |
| 俳句講座                 | 8～9月3講座     | 参加者123名        |
| からむし59号              | 11月1日       |                |
| 文化祭(第31回)            | 10月31日      | 洋舞/邦舞/邦楽/ 美術工芸 |
|                      | ～11月8日      | 麻生フィル/吟舞吟詠     |
| 俳句大会(第27回)           | 11月1日       | 投句者250名        |
| 文化講演会                | 10月31日      | 講師 川染雅司氏       |
| あさお古風七草粥の会<br>(第13回) | (2016年)1月7日 |                |
| かわさき市民芸術祭(第32回)      | 舞台部門(2月28日) | 洋舞洋楽(麻生市民館)    |
|                      | 美術工芸部門      | 絵画・書・工芸        |
|                      | 3月1日～6日     | (アートガーデン)      |
| 雑学教室(第45回)           | 3月5日        | 参加者84名         |
| アルテリッカ新ゆり美術展2016     | 3月7日～13日    | 参観者1437名       |

| 2016(平成28)年度         |              |                |
|----------------------|--------------|----------------|
| 事業                   | 実施月日         | 摘要             |
| 定期総会                 | 4月16日        | 大会議室           |
| からむし60号              | 5月1日         |                |
| デッサン会(第32回)          | 6月12日        | 参加者37名         |
| 夏休み親子教室              | 7月～8月        | 全17教室(参加者336名) |
| 俳句講座                 | 8～9月3講座      | 参加者123名        |
| 文化祭(第32回)            | 10月23日～11月6日 | 洋舞/邦舞/邦楽/ 美術工芸 |
|                      |              | 麻生フィル/吟舞吟詠     |
| 俳句大会(第28回)           | 10月23日       | 投句者146名        |
| からむし61号              | 11月1日        |                |
| 文化講演会                | 11月5日        | 麻生6大学          |
| あさお古風七草粥の会<br>(第14回) | (2017年)1月7日  | 1100食提供        |
| 雑学教室                 | 3月4日         | 講師 水田徹氏        |
| かわさき市民芸術祭(第33回)      | 舞台部門(3月5日)   | 吟舞吟詠(教文会館)     |
|                      | 美術工芸部門       | 絵画・書・工芸        |
|                      | 1月17日-22日    | (アートガーデン)      |
| アルテリッカ新ゆり美術展2017     | 3月6日～12日     | 参観者1614名       |

| 2017(平成29)年度     |             |                |
|------------------|-------------|----------------|
| 事業               | 実施月日        | 摘要             |
| 定期総会             | 4月15日       | 大会議室           |
| からむし62号          | 5月1日        |                |
| デッサン会(第33回)      | 6月4日        | 参加者54名         |
| 夏休み親子教室          | 7月～8月       | 全17教室(参加者388名) |
| 俳句講座             | 8～9月3講座     | 参加者110名        |
| 文化講演会            | 9月23日       | 麻生の6大学         |
| 文化祭(第33回)        | 10月27日      | 洋舞/邦舞/邦楽/ 美術工芸 |
|                  | ～11月3日      | 麻生フィル/吟舞吟詠     |
| 俳句大会(第29回)       | 10月22日      | 投句者152名        |
| からむし63号          | 11月1日       |                |
| あさお古風七草粥の会(第15回) | (2018年)1月7日 | 1085食提供        |
| 雑学教室             | 3月3日        | 講師 安藤正憲氏 70名   |
| かわさき市民芸術祭(第34回)  | 舞台部門(3月4日)  | 洋舞(幸市民館)       |
|                  | 美術工芸部門      | 絵画・書・写真・工芸     |
|                  | 2月20日～25日   | (アートガーデン)      |
| アルテリッカ新ゆり美術展2018 | 3月5日～11日    | 参観者1525名       |

| 2018(平成30)年度     |             |                 |
|------------------|-------------|-----------------|
| 事業               | 実施月日        | 摘要              |
| 定期総会             | 4月21日       | 大会議室            |
| デッサン会(第34回)      | 6月1日        | 参加者48名          |
| 夏休み親子教室          | 7月～8月       | 全14教室(参加者485名)  |
| 俳句講座             | 8～9月3講座     | 参加者220名         |
| からむし64号          | 9月30日       |                 |
| 文化祭(第34回)        | 10月21日      | 洋舞/邦舞/邦楽/ 美術工芸  |
|                  | ～11月4日      | 麻生フィル/吟舞吟詠      |
| 文化講演会            | 10月21日      | 講師 西留広喜氏・宍戸哉夫氏  |
| 俳句大会(第30回)       | 11月4日       | 投句者146名         |
| からむし65号          | 11月30日      |                 |
| あさお古風七草粥の会(第16回) | (2019年)1月7日 | 1005食提供         |
| アルテリッカ新ゆり美術展2019 | 3月4日～10日    | 参観者1200名        |
| かわさき市民芸術祭(第35回)  | 舞台部門(3月3日)  | 邦舞・洋舞(カルッツかわさき) |
|                  | 美術工芸部門      | 絵画・書・写真・工芸      |
|                  | 2月19日～27日   | (アートガーデン)       |
| 雑学教室             | 3月9日        | 講師 平本一雄氏72名     |

| 2019(令和1)年度                 |             |                             |
|-----------------------------|-------------|-----------------------------|
| 事業                          | 実施月日        | 摘要                          |
| 定期総会                        | 4月20日       | 区役所第1・2会議室                  |
| からむし66号                     | 5月31日       |                             |
| デッサン会(第35回)                 | 7月14日       | 参加者30名                      |
| 夏休み親子教室                     | 7月～8月       | 全15教室(参加者237名)              |
| 俳句講座                        | 10月8日       | 講師 酒井弘司氏・河邑厚徳氏              |
| 文化祭(第35回)                   | 10月6日～11月3日 | 洋舞/邦舞/邦楽/美術工芸<br>麻生フィル/吟舞吟詠 |
| 俳句大会(第31回)                  | 11月3日       | 投句者148名                     |
| からむし67号                     | 11月1日       |                             |
| あさお古風七草粥の会<br>(第17回)        | (2020年)1月7日 | 940食提供                      |
| かわさき市民芸術祭(第36回)<br>コロナのため中止 | 舞台部門(3月8日)  | コロナのため中止                    |
|                             | 美術工芸部門      | 絵画・写真・書・工芸                  |
|                             | 1月18日～23日   | (アートガーデン)                   |
| 文化講演会                       | 3月7日        | コロナのため中止                    |
| アルテリッカ新ゆり美術展<br>2020        | 3月2日～8日     | 参観者1011名                    |

| 2020(令和2)年度          |              |                             |
|----------------------|--------------|-----------------------------|
| 事業                   | 実施月日         | 摘要                          |
| 定期総会                 | 4月10日        | コロナのため書面審議                  |
| からむし68号              | 7月1日         |                             |
| 夏休み親子教室              | —            | コロナのため中止                    |
| 文化祭(第36回)            | 10月25日～11月4日 | 洋舞/邦舞/邦楽/美術工芸<br>麻生フィル/吟舞吟詠 |
| デッサン会(第36回)          | 10月31日       | 参加者30名                      |
| 俳句大会(第32回)           | 11月1日        | 投句者138名                     |
| あさお古風七草粥の会           | (2021年)1月7日  | コロナのため中止/パネル展示              |
| かわさき市民芸術祭(第37回)      | —            | コロナのため中止                    |
| アルテリッカ新ゆり美術展<br>2021 | 3月1日～7日      | 参観者1019名                    |
| からむし69号              | 3月1日         |                             |
| 文化講演会                | 3月7日         | 講師 岡部信彦氏                    |

| 2021(令和3)年度          |              |                             |
|----------------------|--------------|-----------------------------|
| 事業                   | 実施月日         | 摘要                          |
| 定期総会                 | 4月17日        | 区役所第1会議室                    |
| デッサン会(第37回)          | 6月19日        | 参加者30名                      |
| 夏休み親子教室              | 7月～8月        | コロナのため中止                    |
| からむし70号              | 9月1日         |                             |
| 文化祭(第37回)            | 10月18日～11月3日 | 洋舞/邦舞/邦楽/美術工芸<br>麻生フィル/吟舞吟詠 |
| 俳句大会(第33回)           | 10月30日       | 投句者129名                     |
| あさお古風七草粥の会<br>(第18回) | (2022年)1月7日  | 397食提供                      |
| かわさき市民芸術祭(第38回)      | 舞台部門(3月5日)   | 洋舞洋楽(カルッツ川崎)                |
|                      | 美術工芸部門       | 絵画・写真・書・工芸                  |
|                      | 2月7日～12日     | (アートガーデン)                   |
| 文化講演会                | 3月5日         | 菊地恒雄氏                       |
| アルテリッカ新ゆり美術展2022     | 3月7日～13日     | 参観者1505名                    |

| 2022(令和4)年度          |              |                             |
|----------------------|--------------|-----------------------------|
| 事業                   | 実施月日         | 摘要                          |
| 定期総会                 | 4月23日        | 区役所第1会議室                    |
| デッサン会(第38回)          | 9月10日        | 参加者32名                      |
| 夏休み親子教室              | 7月～8月        | 全10教室 参加者147名               |
| からむし71号              | 7月30日        |                             |
| 俳句講座                 | 9月13日        | 講師 山田貴世氏                    |
| 文化祭(第38回)            | 10月22日～11月6日 | 洋舞/邦舞/邦楽/美術工芸<br>麻生フィル/吟舞吟詠 |
| 俳句大会(第34回)           | 10月22日       | 投句者128名                     |
| 文化講演会                | 3月4日         | 講師 原武史氏 参加者119名             |
| あさお古風七草粥の会<br>(第19回) | (2023年)1月7日  | 1000食(テイクアウト100食含む)         |
| かわさき市民芸術祭(第39回)      | 舞台部門(3月5日)   | 洋舞洋楽(カルッツ川崎)                |
|                      | 美術工芸部門       | 絵画・写真・書・工芸                  |
|                      | 2月7日～12日     | (アートガーデン)                   |
| アルテリッカ新ゆり美術展2023     | 3月6日～12日     | 参観者1602名                    |
| からむし72号              | 3月31日        |                             |

| 2023(令和5)年度      |                    |                             |
|------------------|--------------------|-----------------------------|
| 事業               | 実施月日               | 摘要                          |
| 定期総会             | 4月22日              | 区役所第1会議室                    |
| デッサン会(第39回)      | 7月15日              | 参加者30名                      |
| 俳句講座             | 7月24日              | 映画上映(アートセンター)               |
| 夏休み親子教室          | 7月～8月              | 全12教室 参加者123名               |
| からむし73号          | 9月30日              |                             |
| 文化祭(第39回)        | 10月21日～11月5日       | 洋舞/邦舞/邦楽/美術工芸<br>麻生フィル/吟舞吟詠 |
|                  | 2024年1月19日-24日     | 美術工芸                        |
| 俳句大会(第35回)       | 10月21日             | 投句数439句                     |
| あさお古風七草粥の会(第20回) | (2024年)1月7日        | 1000食提供                     |
| 文化講演会            | 3月9日               | 講師 小川信夫氏                    |
| かわさき市民芸術祭(第40回)  | 舞台部門(3月24日)        | 洋舞洋楽(カルッツ川崎)                |
|                  | 美術工芸部門<br>2月6日～11日 | 絵画・写真・書・工芸<br>(アートガーデン)     |
| アルテリッカ新ゆり美術展2024 | 3月4日～10日           | 参観者1469名                    |
| からむし74号          | 3月31日              |                             |

| 2024(令和6)年度      |                   |                             |
|------------------|-------------------|-----------------------------|
| 事業               | 実施月日              | 摘要                          |
| 定期総会             | 4月21日             | 区役所第1会議室                    |
| デッサン会(第40回)      | 6月15日             | 参加者30名                      |
| 夏休み親子教室          | 7月～8月             | 全11教室 参加者154名               |
| 俳句講座             | 9月10日             | 講師 なつはづき氏                   |
| からむし75号          | 9月30日             |                             |
| 文化祭(第40回)        | 10月19日～11月6日      | 洋舞/邦舞/邦楽/美術工芸<br>麻生フィル/吟舞吟詠 |
|                  | 10月19日            | 投句数479句                     |
| あさお古風七草粥の会(第21回) | (2025年)1月7日       | 850食提供                      |
| かわさき市民芸術祭(第41回)  | 舞台部門(3月9日)        | 吟舞吟詠(カルッツ川崎)                |
|                  | 美術工芸部門<br>2月4日～9日 | 絵画・写真・書・工芸<br>(アートガーデン)     |
| アルテリッカ新ゆり美術展2025 | 3月3日～9日           |                             |
| 40周年記念誌(76号)発行   | 3月15日             |                             |
| 創立40周年記念式典       | 3月15日             |                             |

会報『からむし』 58号～75号



58号



59号



60号



61号



62号



63号



64号



65号



66号

会報「からむし」の詳細については麻生区文化協会公式ホームページをご覧ください。  
 ＊右記 QR よりアクセスいただけます <https://asaoku-culture-assoc.com/newsletter/>



67号



68号



69号



70号



71号



72号



73号



74号

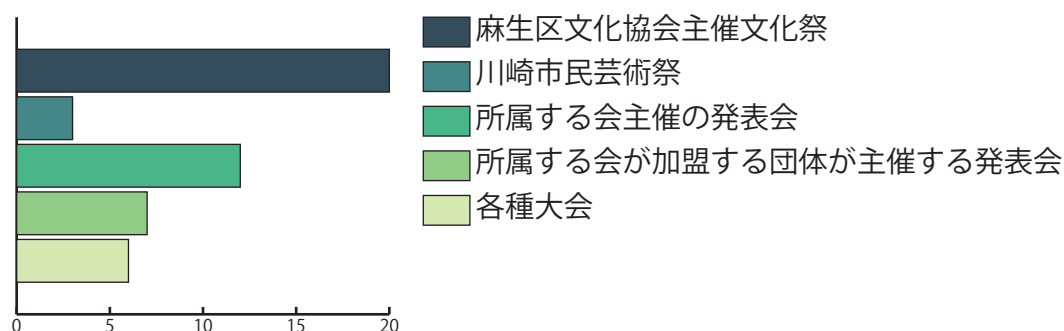


75号

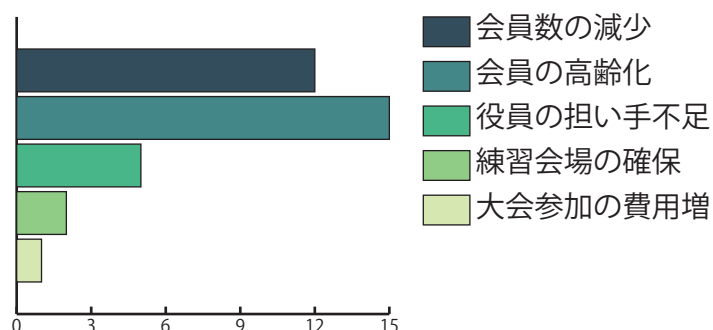
## 個人

回答数：29 名

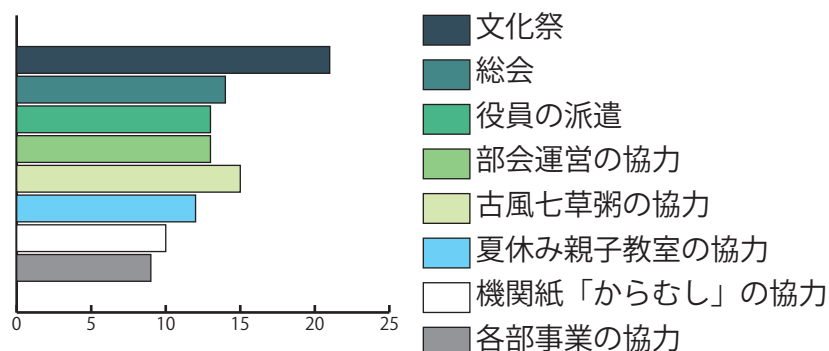
### 主な行事への参加



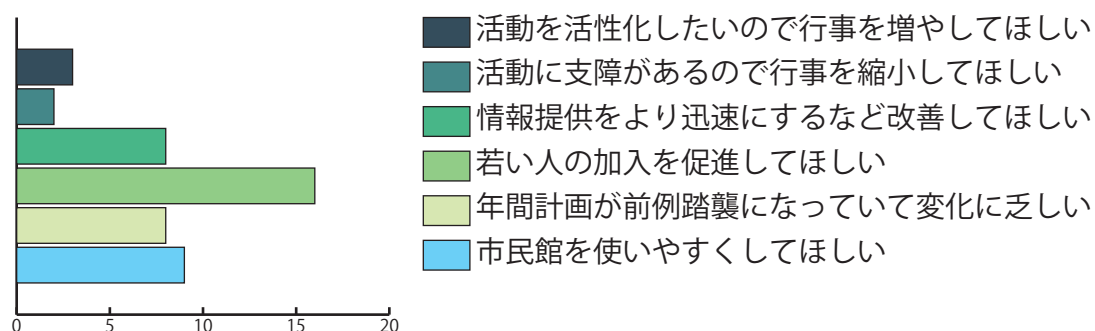
### 会の課題



### 文化協会行事への参加・協力



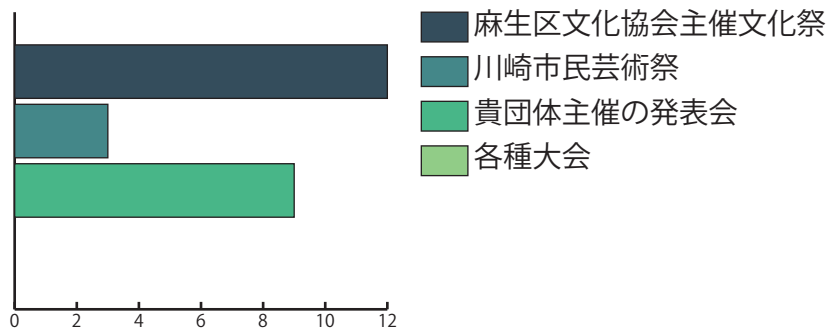
### 文化協会への意見・要望



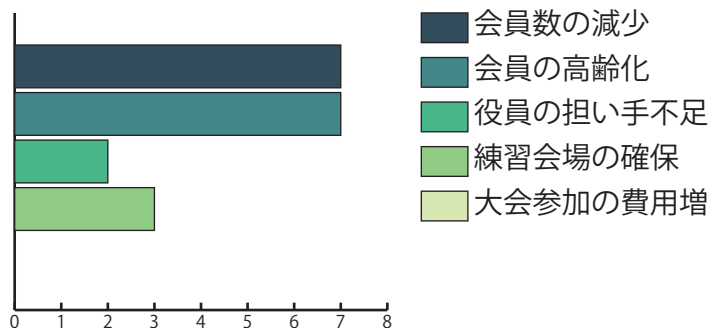
## 団体

回答数：12 団体

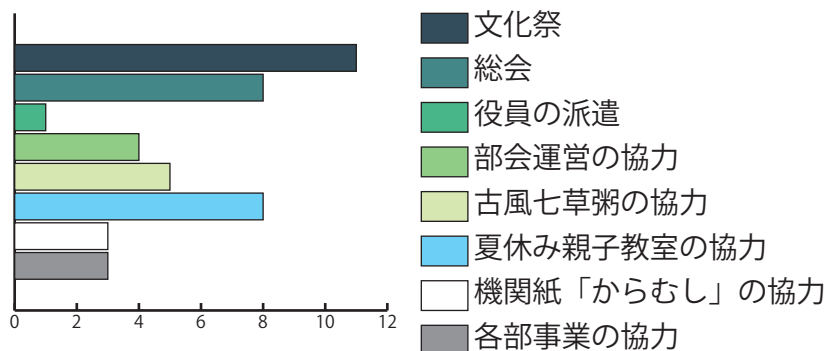
## 主な行事への参加



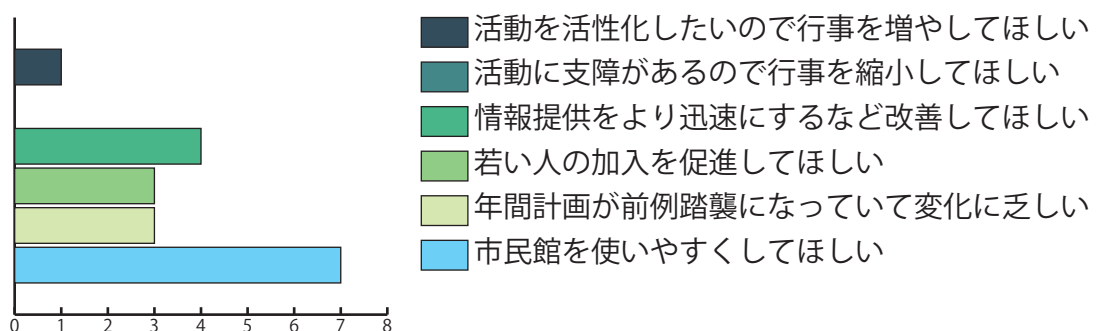
## 会の課題



## 文化協会行事への参加



## 文化協会への意見・要望





## 表紙絵について

佐藤 英行

### 柿生は禅寺丸柿から始まる

この 40 周年記念誌の表紙絵は禅寺丸柿で、麻生区の歴史が始まります 1214 年（建保 2 年）王禅寺の山中で発見された甘柿は、以来この地域の特産として、柿、養蚕、炭が収益となり発展してきたのです。昭和 7 年の調査で約 9000 本の柿の木が育てられていた江戸時代から、馬にのせその後大八車からリヤカーで列をつくり東京、渋谷、神田まで売りに行ったそうです。

一時は、柿ワインも製造しましたが時代と共に大きな柿におされ、今は一部の人々の楽しみになっています。昭和になると柿の木のある牧歌的風景は絵描きさんに好まれ、日曜日ともなると柿生駅に降り立ち各部落に散って行ったようです。

## 麻生区文化協会 設立 40 周年記念誌 からむし 76 号

発行日 2025 年 3 月 15 日

発行所 〒215-0004

神奈川県川崎市麻生区万福寺 1-5-2 麻生区市民館内

TEL : 044-951-1300 FAX : 044-951-1650

発行者 麻生区文化協会

編集委員 板橋 洋一・伊藤 胡桃・井上 俊夫・小田島 寛

木村 幾子・佐藤 勝昭・菅原 敬子・関森 田鶴子

橋本 周・横川 博行・横須賀 朝子 （五十音順、敬称略）



